
時空夢想記

蒼紫なつめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時空夢想記

【Nコード】

N0163Z

【作者名】

蒼紫なつめ

【あらすじ】

それは、大切なものを護るための戦い。

譲れない大切なもの。

それを護るためなら、どんな事でもしてみせる。

たとえば、この手が罪に穢れようと……。

たとえば、どんなに犠牲を払っても……。

綺麗事だけじゃ、世の中やっていけない。

護りたい人がいる。失いたくない人がいる。

何にも代えられない大切な人がいる。

罪に穢れようと、愚かと言われようと、立ち止まらない。

罪に汚れた手が掴むのは、光（希望）か、それとも闇（絶望）か……。

物語の結末を決めるのは、神でも運命でもなく、少女次第――。

※この小説は魔法のiらんど様で連載していた同作品を転載したものに なります。

プロローグ

ぱたぱたと待ちきれないように時計を見ながら、動き回る少女が一人。

時計を見ては、目の前にある玄関の扉を見つめる。

少女——さくはら せんき朔原千姫は、それを何度も繰り返しながら、玄関の周りを歩き回る。

肩より少しだけ上の艶のある綺麗な黒髪に後ろはピンクのリボンがついている。

可愛らしい大きな紫苑の瞳は、今は不満を表していた。

千姫が時計を見て、玄関の扉を見る動きを何回も繰り返した時、玄関の扉が開いた。

それと、同時に先程までの不満そうな顔から一気に明るくなり、扉を開けた人物に飛び付いた。

「おかえり！ 賢兄！」

千姫は、満面の笑顔で飛び付いた人物を見上げる。

賢兄と呼ばれた人の芯の強そうな綺麗な黒髪に眼鏡の向こうに見える優しさが窺える黒い瞳が、少しだけびっくりしたように呆けながら千姫を見つめる。が、すぐに不敵な笑顔を浮かべた。

「なんや〜？ しばらく、お兄ちゃんに会えへんかったから寂しかったん？」

少しだけおかしい関西弁で喋るこの人は、さくはら けん朔原賢。

千姫の兄で良く当たると最近有名になってきた占い師。

賢の占いの師匠は、とても有名な占い師でテレビや新聞などでも

取り上げられまくっている。

その師匠の元に占いを本格的に学ぶために賢は、長い間大阪に行っていて、今日久々に千姫達の家に戻ってきたのだ。

「あら、お帰りなさい。賢」

「あ、お母さん」

「母さん。ただいまー」

玄関の騒がしい様子に気付いたのか、千姫の母がリビングから出てきた。

賢が片手を挙げて、ヘラッと微笑むと母は、クスッと笑った。

「はいはい。お帰りなさい。賢が帰ってくるまで、千姫ってば、ずっと玄関の周りをうろちよろしてたのよ」

「なっ!？」 お、お母さん! それは言わない約束だよ!」

「あらあら、そうだったかしら? ごめんなさいね。母さんも年かしら」

おほほと片手で口元を隠して、笑う母に対して、千姫は膨れた面で母を半眼で睨む。それに対して、母は涼しい顔。

そんな様子を見て、賢は懐かしそうに笑う。

「自分ら、相変わらずやな。全然変わつとらんやんか」

「賢兄こそ全然かわってないでしょ! それより、そのエセ関西弁はどうしたの?」

「エセ言うなや。しゃーないやろ。あそこに居るとうつるんや」

賢は、少しだけ何かを思い出すようにふっと優しげな笑顔を浮かべる。

「まあ、賢の口調はともかく、今日はご馳走にしましょうね」

「本当！？ やったーっ！」

「それでね、^{とし}迅君も呼んできてあげて。私は、準備なくちゃいけないから」

「はい」

母は、それだけ言うとそのくさと台所に行ってしまう。

千姫も靴を履いて、外に出ようとすれば賢も後ろからついてきた。

「あれ？ 賢兄も来るの？」

「おう！ 俺も久々に迅に会いたいんや。会うのは久々やからな。大っきくなってるんやろうな」

そう言っただけ懐かしそうにしながら笑った。

迅とは、千姫の家の隣に住んでいる千姫と同じ年の男の子の事だ。所謂、幼なじみ。

家が隣なだけ直ぐにつく。千姫が玄関でチャイムを鳴らすとしばらくしてから、扉の向こうから気だるそうな声が聞こえた。

「どちら様？」

「あ、迅！ 私だよ」

「……人違いです」

「ちょっと！ 明らかに迅でしょ！ めんどくさいからって、それはないわよ！ 出てきなさい！」

千姫がそう扉に向かって怒鳴れば、扉の向こうで、ハアと思いきりため息をつくのが聞こえた。

中から出てきたのは、当たり前だが千姫の幼なじみの^{くさなみとし}玖裳南迅。

薄い茶色の髪が無造作にはねていて、気だるそうに細められた薄茶の瞳が千姫とその横にいた賢を捉えた。

賢は迅を見ると、ニヤリと言う言葉が似合う顔で笑った。

「よう！ 久し振りやな！ どや、最近は？」

「賢兄。帰ってきたんだ。てか、何その関西弁」

「なんでお前ら皆、そこに食いつくねん！ ええやろ、別に」

少しだけ拗ねたように、ぷいと視線を逸らす賢に対して、迅はめんどくさそうにため息をついた。

「……で、何の用？」

「そんなん決まっとるやろ！ 大っきくなった迅を見にきたんや！
ほんまに成長したなー」

「まあ、二年も経てばね」

にこにこ笑顔の賢に対して、迅もほんの少しだけ嬉しそうな顔をしていた。

小さい頃から、忙しい迅の両親は迅をよく千姫達の家に残けていた。

そのせいか、賢も迅を本当の弟のように大切にされていて、迅も表情には出さないが賢を兄のように慕っていた。

「あ、迅。千姫とは俺が居ない間、何も無かったやろな？」

にっこりと笑っている賢の笑顔が黒いのは、きっと気のせいじゃない筈。

そう、賢は迅の事を本当の弟のように大切にしているけど、やはり千姫は別格らしく、二人の交際を認めようとはしないのだ。

可愛らしい容姿で人気者の千姫に彼氏がいたことがないのは、賢のせいなんだろうなと迅は賢に見つめられながらそんな事を考えた。しかし、迅より先に賢の言葉に反応したのは千姫だった。

「な、何言ってるんの賢兄！ 私と迅に何かあるわけないでしょ！
ただの幼なじみなんだから」

千姫の言いきった言葉に賢は満足そうだが、ある意味可哀想と迅に同情の視線を向ける。

迅は、呆れたように額に手を添えた。そして、千姫に彼氏が出来ないのは賢だけじゃなく、こいつの鈍感さも大問題だなと思い直したのだった。

人の事には敏感だけど、自分の事には鈍感すぎる千姫。

どんなに好意を見せても、さらりと受け流すこの娘をどうしろと？

迅は、更に呆れたため息をついた。

「あんまりため息ばっかつくと幸せが逃げるよ？」

「うるさいな。もう用は終わったんだろ？ 家に帰れよ。俺はもう寝る」

「駄目！ まだ用は終わってないの！ 今日は、賢兄の帰りの祝いとして、お母さんがご馳走をつくるから、迅も食べに来るの。どうせ、家にいたってカップ麺とかしか食べないんだから」

強く迅を睨みながら、そう言い放ち、迅の腕を掴み無理矢理引き摺りだす。

それに迅は抗おうともがくが、やがて諦めたように千姫にされるがまま連れていかれた。

迅の両親は、今も忙しく海外を飛び回っているのです、迅は一人暮らし状態だが、めんどくさがりやの迅は放っておくとご飯も食べないので、千姫がご飯を作ったりしてあげているのだ。

やはり、隣なので直ぐに家につく。

千姫は迅の腕を掴んだ状態で、扉を開けるとそのまま靴を脱ぎ、リビングへ向かう。

「お母さん。迅速れてきたよ」

「あら、迅君いらっしゃい。あと、ちょっとで出来るからもうちょっと待っててね」

「あ、お構い無く」

そう返事をする、迅はすぐ側にあったソファに座った。千姫も迅の隣に座ると、賢は千姫達の前のソファに座った。

そこからは、他愛のない話ばかりをしていた。

大阪の事。占いの事。学校の事。変わった事など。

別に特に変わった話じゃないけど、凄く楽しかった。

しばらくすると、千姫の父親も帰ってきた。

「おっ、迅君じゃないか。久し振りだね」

「お久し振りです」

「って、ちょい待ち！ 父さん、なぜに俺をしかとすんねん！ 可愛い息子が帰ってきたんよ！？」

和やかに迅に笑いかける父に対して、賢は自分を指差しながら父に話しかける。父は、その言葉にふっと視線を賢に移す。そして、何か懐かしそうに瞳を細めて……。

「おお、お前は……」

「父さんっ！」

「どちら様でしたっけ？」

いきなり真面目な顔でのその言葉に賢は、漫画のようにつつこけた。

「賢兄。見てるこっちが恥ずかしい」

「……ふっ」

千姫は、少しだけ顔を赤らめ、迅は笑いを堪えていたけど堪えきれずに吹き出した。しかし、そんな事は気にせずに賢は父親を見つめる。とても悲しそうな顔で……。

それに堪えきれなかった父親は、盛大に笑いだした。

「……あははは。冗談だよ。冗談。……お帰り、賢」

「……父さん。うん。ただいま」

父親を少しだけ恨めしそうに見るが、父親の優しい笑顔に賢の表情も緩む。そんな時、やっと料理が出来た。

その後は、皆で料理を囲んで大騒ぎ。

幸せな家族。幼なじみ。仲の良い友達。勉強は嫌いだけど学校だつて楽しい。

そんな夢のように幸せの日々に満たされて、千姫の日常は続いていく。

そう、これ以上は何も望んでいなかった。これからもこんな幸せが続くと信じていた――。

料理も食べ終わり、迅も自分の家に帰り、母は洗い物をして、千姫はお風呂に入っていた。

お風呂から上がり、部屋に戻る途中に賢と出会った。賢の表情には、いつもの朗らかさがなく、とても真剣な眼差しで千姫を見つめていた。

「賢兄。どうしたの？」

「……お前、近いうちにとてつもなく大きな運命に呑み込まれる。そんな嫌な予感がする」

「え？」

真面目で関西弁すら使っていない賢の真剣さに何故か背筋に寒気が走る。

そのせいか、賢には千姫が落ち込んでるように見えたのか、いつもの優しい笑顔に戻り、千姫の頭を撫でた。

「ま、気にすんなや。俺の気のせいかもしれへんしな。明日学校やろ？ もう寝なや。……おやすみ」

「うん。……おやすみ」

賢の優しい笑顔に、乱れた心が鎮まっていく。そして、賢に笑ってから部屋に戻り、それから倒れ込むようにベッドに潜った。

ベッドに入ると、一気に眠気が襲ってきて、そのまま意識を闇の中に引っ張られた。

赤い、赤い。燃えていく。大切なものが……。

殺されていく。大切な人達が……。

力がないものは泣くことしかできない。自分の非力さに泣くことしかできない。

……力が欲しい。

「……ゆ……め？」

目を開ければ、見慣れた天井。間違いなく自分の部屋。

千姫は、上半身だけ起こして、辺りを見渡してから、小さく息をついた。

詳しくは覚えてないけど、なんだか嫌な夢だった気がする。胸の奥がもやもやするが、気にしていてもしょうがない。

「よし！」

小さく呟いて気合を入れる。

時計に目をやれば、時刻は七時丁度。

勢いよくベッドから飛び出して身支度を整える。

リビングで用意されている朝食を食べていると眠そうに大きなあくびをしながら賢がやってきた。

「おはよう、賢兄」

「おはようさん。朝から元気やな」

「元気が私の取り柄だからね。さてと、じゃあ、もう行くね」

勢いよく椅子から立ち上がり、隣の椅子に置いてあった鞆を取り、扉を開けようとした途端――。

「千姫っ！」

賢の叫び声と共に腕を強く掴まれた。千姫は、賢の突然の行動に驚いたように振り返った。

「びっ……くりしたー。どうしたの？」

「……え、あ……。悪い。気にすんなや。……ほら、はよ行かんと遅刻するやろ」

「賢兄が引き留めたくせに……まあ、いいや。行ってきます」

「気いつけていけや！」

賢の言葉に見送られながら千姫は、大きく頷いてから家を出ていった。千姫の出たいった後を賢は妙に真剣な顔で見つめていた。

千姫が家を一步出た途端、急にドクンッと心臓が大きく跳ねた。急激に頭に痛みが走る。胸が苦しい。

「……な、に……？」

突然の痛みに誰が答える訳もないのに問いかける。

……私を……呼んでる……？

突然の痛みがまるで自分と呼んでるように感じて、千姫はおぼつかない足取りで痛みが導く方へと歩きだす。

迅の家の前を通り過ぎようとした時、丁度迅が家から出てきた。

「あれ？ 千姫。いつもはしつこいぐらい迎えにくるくせに今日は、素通り？」

迅が若干皮肉めいた口調で千姫に呼び掛けるが千姫は、聞こえていないのか迅を無視してそのまま歩きだす。

それに迅は不思議そうに千姫を見るが、千姫は迅を見ようともせずに学校とは反対方向の道に進む。

千姫の瞳には何も映さず、まるで操られて、千姫の感情がないように感じられる。

「ちょっと、千姫。どこに行くんだ？ そっちは学校と反対方向だぞ」

再び迅が慌てたように呼び掛けるが、千姫はそれすらも無視して歩き続ける。

迅はめんどくさそうにため息をついてから、千姫の後をついていく。千姫は無言のまま、道から外れて草むらの道を進む。

迅が何度も呼び掛けるが、千姫は無言で足早に歩き続ける。迅はいい加減に限界なのか呆れた口調で千姫に怒鳴ると同時に、突然草むらだらけの視界が開けた。

「千姫！ いい加減にしろよ」

強い口調で言い放てば、今まで何を言っても無言だった千姫の肩を掴んだ瞬間、びくと跳び跳ねた。そして、瞳に光が――千姫の感情が戻った。千姫は、突然の事に迅を驚いた様に見つめた。

「びっ……くりしたー。なんだ、迅か。驚かせないでよね」

千姫は、胸を押さえて、ふうと安堵の息をつく。そして、何かに気づいたように辺りを見渡した。

「……ここ……どこ？」

「俺が知るか。千姫がここまで来たんだろう？」

「……私が？」

信じられないとでも言うように考え込む千姫に迅は、めんどくさそうに頭をかいた。

「ここは、神社？」

「それにしても、小さ過ぎだろ？ 多分あそこにあるのが祠だろうけど……」

かったるそうに迅が指差す先には、確かに小さいが祠みたいのがある。

なんだか胸が騒ぐ。

……呼んでいる？

「そんな事より、学校遅刻するぞ」

迅がそんな風に言っても千姫の視線は、祠から外れない。真っ直ぐ祠を見つめて……。

「なんだかあの祠、凄く気にならない？」

「……俺は、なんだか嫌な感じがする」

「そう、かな？ 近付いてみよっか」

「おいっ！」

迅が静止の声を掛けるにも関わらず、千姫は導かれるように祠へと近付く。迅も仕方なく千姫に続いて、祠に近付く。その時――。

「あかん！ その祠に近付くな！」

「え？」

聞きなれた声に振り返ると同時に急に祠から眩し過ぎるほどの光が発せられた。

振り返った千姫の視線の先には賢が……。

どうしてこんな所にいるのだろうか？

そんな事を考える前に光に体が包まれていく。

「な、なな、何！？ 何が起こってるの！？」

『……見つけた。――おいで、あなた――国へ……。運命を変える――少女よ』

「誰！？」

突然、聞こえた声に辺りを見渡すが人の姿はない。所々、途切れ何と言っているのか分からない。

光に包まれる視界の中、迅も光に包まれていたのが見えた。

『……人々の愚かな戦いに終止符を……。手を汚す事を迷うな。道を迷えば大切なものは全て無くなる』

意識が段々と奪われていく。それでも、姿なき声は直接頭に響いてく。

『……期待している。尊き——戦——の——少女よ』

大事な所が聞こえないせいで意味が分からなかったけど、その声を最後に意識が途切れた。

意識が途切れる少し前に賢兄の叫び声が聞こえた気がした。

光が消え去った後、祠に残ったのは呆然とした様子の賢だけで、千姫達の姿は見当たらなかった。

「……千姫……迅……」

賢の言葉は、誰もいない虚空を虚しく響き渡った。

第一話 始まり

— XXX年 華籠^{かこのくに}の国。

「……やはり、話し合いは無理でしたか」

「うむ。だが、こうなってしまった以上、我々も戦うしかない。大切なものを護るために。玖零^{くれい}、力を貸してくれるな」

歳をとつても未だに鋭い眼光を玖零と呼ばれた青年に向けるのが、この——華籠の国の王様だ。

玖零は、実の父親の真剣な表情を見て、ふっと不敵な笑みを浮かべた。

「勿論です。この国のためなら、この笠野玖零^{かさのくれい}の力を存分にお使い致しましょう」

「頼もしい事だ。頼りにしているぞ、我が息子よ」

「はい」

玖零は力強く答えてから、深々とお辞儀をして、部屋を退出した。

「おい、あれ。木暮^{こぐれ}將軍じゃないか」

「ああ、本当だな。横に居るのは鵜月^{やつぎ}軍師か」

「まったく王も何を考えているのか。あんな灰色の髪に銀髪の髪

少年を將軍や軍師にするなんて……」

「全くだ。確かに剣の腕は立つかもしれないが、あんな素性の知れない奴等を優遇するなんて」

「……あんなあり得ない髪の色なんて、きっと妖かなにかだ」

二人の男性が、少し離れた所にいる、珍しいけれど、とても綺麗な灰色の髪と瞳を持つ青年とまだ幼く、あどけなさな残る、透き通るように綺麗な銀色の髪と瞳を持つ少年を見ながらそんな話を話した。

その声は大きく、まるで本人達にわざと聞こえるように言っているようだった。

それに銀髪の少年——やづきはら鶴月徠牙は、ムツとした表情で二人の男性の所に向かおうとするが、すぐに横にいた灰色の髪の青年——こぐれ木暮弥澄に止められた。

「弥澄様！ でもっ……！」

「止めておけ。あんな奴等は放っておけばいいんだ」

弥澄にそう言われて、徠牙は、しゅんと項垂れた。それを見て、弥澄は優しく笑う。しかし、その笑顔はどこか悲しげだった。

「ふん。腰抜けだな。王も早くあんな得たいの知れない奴等、城から追い出せばいいのに」

「全くだ」

「そこまで」

男が頷いた時、どこからか凜とした声が聞こえた。それに二人の男と弥澄と徠牙が声の方向に視線を向けた。

『玖零（様）！？』

弥澄と徠牙と男二人の驚きの声が見事に重なった。

そこには、不敵な笑顔を浮かべている、柔らかそうな黒髪に強い意思を感じる黒い瞳の青年——玖零が立っていた。笑顔の玖零だが、男二人を見る眼光は鋭い。

「……さて、俺の友人を侮辱すると言うことは、俺を侮辱するのと一緒にだ」

「そ、そ、そそそんな滅相もない！　王子を侮辱するなど、とてもとても……」

「ふーん」

玖零の鋭い眼光で見つめられて、次第に男がしどろもどろに喋る。

「じゃあ、良く覚えときなよ。次に弥澄達を悪く言ったら、俺を敵にまわすってな。他の奴等にもそう伝えておけ」

『はいっ！』

二人の男は、ビシッと同時に敬礼してから、脱兎の如くその場から逃げ出した。それを見て、玖零はくすくすと楽しそうに笑う。

「……お前、本当に男には容赦ないな。まあ、助かったけど」

「当然だろ？　何が悲しくて野郎になんぞ、優しくしなきゃいけないんだ」

「じゃあ、もし、今の人達が凄く美人の女の人達だったらどうしてた？」

「……そんなのは決まってるだろ。もちろん、なにもしない」

当然の如く、真顔で言い切る玖零に弥澄と徠牙は呆れたため息を

ついた。

それを見て、玖零は何を考えているのかまた楽しげに笑った。

「……それで、話し合いはどうなったんですか？」

「下らない事を抜かしてないで、早く言え」

「そうですよ、兄様！ 話し合いはどうなったんですか!？」

「都架也、悠緋、白桜まで」

玖零が驚いたように突然現れた三人の男女を見た。

都架也と呼ばれた青年は、ひだまりのように暖かいオレンジ色の髪に優しいオレンジ色の瞳を呆れたように弥澄達に向けていた。

その横では、悠緋と呼ばれた見事なまでに純白の髪を後ろで緩く縛っている青年の夕日のように赤い紅の瞳が厳しさにより細められ、玖零を見つめる——もとい、睨んでいた。

白桜と呼ばれた腰まで伸びた、さらさらストレートの淡い桜色の髪に髪と同じ優しい淡い桜色の瞳の少女も都架也、悠緋と同じように強い視線を弥澄達に向けた。

三人の強い視線を受け、玖零は、やれやれという感じにため息をついた。

「……話し合いは決裂。戦争まで秒読みって所だね」

玖零の言葉に弥澄達の表情が翳る。

「……そう、ですか……」

白桜の少しだけ、落ち込んだ声に皆が黙りこむ。だが、突如、パツと何かを叩く音が響き、皆が驚いた様に視線を移した。

そこに居たのは、両手を合わせて、力強く前を見ていた弥澄だった。

「……本当なら、話し合いで解決して、誰も傷付けないで、皆が平和に過ごせば良かったけど……。大切な所を……。俺を認めてくれた皆を護るために……。俺は容赦しない。決して立ち止まらない。俺は罪を背負って生きる！」

それは、決意。大切なものを護るためなら自分を犠牲にする、他人も犠牲にする。

世の中は、綺麗事だけじゃ生きていけない。手を赤く染めても、自分の信念を貫くための決意。

弥澄の力強い決意の言葉に皆の顔にも覚悟の色が浮かぶ。それぞれがそれぞれの決意を胸に愚かな戦いの幕が上がる――。

少しの肌寒さに千姫は軽く身動きした。そして、寒さのせいか、気が付いた様にゆっくりと目を開けた。

目を開いて、視界に映ったのは鮮やかすぎる程綺麗な青だった。そのあまりにも綺麗な青に目を奪われて、食い入るように真っ青な空を見上げた。

しばらく、呆然と眺めていて、そしてようやく気が付いたように辺りを見渡した。

千姫の視線に映ったのは、見渡す限りの新緑だった。

きらきらと日の光に当り、輝く姿はとても綺麗で幻想的だった。林のような場所にでもいるのだろうか？

見渡せば、木しかない事にそんな事を考える。

なぜ自分はこんな所にいる？

千姫は、必死に記憶を辿る。

……確か、学校に行く前に何かに呼ばれた気がして、気付いたら神社みたいな所に迅と居て……。

そうだ、祠！ そこにあった祠に近付いたら、いつの間にかいた賢兄が何かを叫んで、でもその時、祠が光を放って……それで気を失ったんだ。あれ？ でも、気を失う前に誰かに何かを言われた気が……。

考えても、何も分らない。

一体何を言われたのだろうか？ ……って、あれ？ そう言えば、なんで賢兄はあそこに居たのだろうか？ それに迅は？

千姫は、考え込むようにして顔をしかめる。しかし、やがて、パアツと晴れやかな笑顔を浮かべる。

「……なんだ！ 夢かー」

千姫の声に応えるものは、居ないが、千姫は構わず一人で喋る。

「……そうだよ。現実には祠から出た光に巻き込まれて、気付いたら違う世界でしたー！ なんて事は起こる筈ないもんね。やだ、一瞬信じかけちゃったよ！ 私ってば、漫画の読みすぎ！？」

妙にハイテンションで一人騒ぐ千姫。もちろん、それにツツコミを入れるものは誰も居ない。

「あー、びっくりした。それにしてもリアルな夢だな」

そう言って、千姫は座っていた状態から立ち上がり、軽く制服に付いた砂を払う。そんな千姫の背後に一人の人影が……。その人影

の手には一本の白銀に光る刀が……。

人影は、音もなく無慈悲にも千姫に目掛けて刀を振り下ろした。瞬間、千姫は知ってか、知らずか、横に動いた。

そのお陰で目測が外れた刀は、千姫の真横の何もない空を切り裂いた。

「な、な、な何!？」

千姫は、驚いたように人影を振り返った。そこに立っていたのは、見知らぬ男だった。

男は、チツと舌打ちすると再び千姫に刀を振りかざした。

千姫はそれを横に動いて避けると、男を指差して騒いだ。

「な、なななんですか、あなた! 人の夢の中で勝手に刀を振り回さないでください!」

「黙れ! 華籠の国の奴等は皆殺しだ!」

「は? 華籠の国!? どの事ですか!？」

千姫が叫んでも、もう男は何も言わずに千姫目掛けて刀を振り下ろす。

一体何なの!？」

混乱しまくった頭を必死に落ち着かせながら、刀を避ける。

なんで、夢の中で殺されそうにならなきゃいけないの!？」……

夢? そうか、夢なら……何をしても大丈夫よね?

そう考えた千姫の行動は早かった。

男の刀を避けながら、近くに落ちていた丁度いい太さの木の枝を拾い、構える。

その行動に男は、馬鹿にするように笑う。

「はっ、そんなんで戦おうって言うのか?」

「そうよ。悪い？　あなたなんてこれで充分よ」

それが合図だったかのように男が駆け出した。男の刀を千姫は、木で防ぐ。

防いですぐに、テレビや漫画、アニメなどの知識を元に適当に木を振ってみる。しかし、そんな漫画の中だけの知識で戦える筈もなく、結局は防戦一方だった。

只の木で刀を受けきれぬ筈もなく、何度も繰り返すうちに当然の如く木は傷付き、すり減っていく。

何度目かの剣撃を受けた時、ついに耐えきれなくなった木が折れた。

男の刀は、そのまま振り下ろされ、千姫の腕を切り裂いた。

「……っ！」

千姫は、慌てて腕を押さえる。押さえた所から、どんどん血が溢れる。

ドクンドクンと、傷口が鼓動のように跳ねて、熱い。凄まじい痛みが体を駆け抜ける。

……信じたくないけど……夢じゃ、ない……？

そう考えれば、突然今まで襲ってこなかった恐怖が一斉に沸き上がる。体が震える。

怖い、怖い！

ぺたりと、力が抜けたように地面に座り込む千姫を男は楽しそうに見下ろした。

「……これで、終わりだな」

男の声と共に千姫に向かって刀が振り下ろされる。逃げようとしても、力が抜けた体は動こうとしない。

もう駄目だ！

思わず、ギュッと力強く目を瞑った。

目を瞑った千姫の耳に届いたのは、凜々しさを感じる男の声だった。

「……月下心道流三の型。げっかしんどうりゅう半月双刃はんげつそうは」

「がっ！」

続いて、聞こえた男の呻き声。千姫は、おそろおそろ目を開く。目を開いた千姫の視線の先にいたのは、珍しいけれども綺麗な灰色の髪に髪と同じ灰色の瞳の青年だった。

……綺麗な灰色の髪。

思わず、男の髪を見つめてしまう。そして、すぐに事態を確認しようと思いを凝らせば、灰色の髪の青年のすぐ横に先程まで千姫を襲っていた男が横たわっていた。

その体からは、血が溢れ出していて、地面が朱に染まっていた。

……死んでる。

その事に思わず吐き気が込み上げる。

口元を押さえて、吐き気を堪えていると、後ろから男が心配した様子で近付いてきた。

「おい、大丈夫か？」

そう言っ、男が千姫の肩に手を掛けた瞬間――。

「嫌っ！」

千姫は思いつき、男の手を叩いた。それに千姫は、ハッとして思わず男の顔を見る。

良く見れば、男の顔には先程の男の返り血が……。その事に、叩

いた事を謝ろうとしていた千姫は、言葉を呑み込んだ。

男は対して気にした様子もなく、ただ真っ直ぐ千姫を見つめて、それから先程の男に斬られて、怪我している方の腕を引っ張った。

「いっ！」

「大人しくしている」

男はそれだけ言うと、血が出ている千姫の腕を白いタオルのようなもので縛りだした。

強い力で縛られて、激痛が走る。しかし、せっかく手当てをしてくれているので、我慢して歯をくいしばる。

「応急処置だが、これでとりあえずは大丈夫だろ」

「……ありがとうございます」

千姫の腕には綺麗にタオルが巻かれていた。

男は、立ち上がると辺りを見渡してから、視線を千姫に戻した。

「……で、なんでこんな所を女一人で彷徨っている？ あれほど単独行動はとるなど……。あれ？」

男は、今までの凜々しい雰囲気から不意に拍子抜けしたような雰囲気に変わる。

な、なに？

思わず千姫が身構えると、男は、ジーンと千姫を見つめる。

全身をジーンと見つめられて、千姫もどうしていいか分からずに思わず一歩後ろに下がる。瞬間、いつの間に抜いたのか男の刀が千姫の首元に突き付けられた。

「動くな。一歩でも動いたら斬る」

男の言葉に千姫は、コクンコクンと何度も頷いた。すると男は、少しだけ雰囲気を変えたが、まだ厳しい雰囲気のまま千姫を見つめた。

「……お前何者だ？ 俺達の隊服に似ていたから、思わず助けたが……。俺達の服とは違う。それによく考えたら軍に女って白桜しかないからな」

値踏みするかのような男の言葉に千姫は何も言えない。男の威圧感が怖くて、声が出なかった。しかし、男が言った俺達の隊服と言う言葉に千姫は思わず男の服を見た。

セーラー服を基調としていて、白をメインに腰の所で二本の水色の紐をリボン結びにしている。

肩の所で切れ込みが入っていて、右腕の所に四つのピンク色の花びらを真ん中にして、花の左後ろに黒い三日月が書かれていて、それが丸く黄色で囲ってある紋様みたいなのが書いてあった。後は、腰の所に日本刀のような刀を差していて、白いズボンをはいていた。確かに、セーラー服と似てるかも……。

そんな事を考えていれば、男の刀が再び、千姫の首に近付く。

「何者だと聞いているんだ。答えろ」

「……な、何者って言われても……。私は、普通的女子高生です！」

「女子高生？ なんだそれは？」

「え？ そう言われても、女子高生は女子高生だし……」

厳しい瞳で見つめられれば、次第に千姫の言葉もしどろもどろになっていく。男は、しばらく千姫を見つめたあと、ふっと厳しい雰囲気を解いて、刀をしまった。

「……まあ、お前の事は玖零に任せるか。……よし、ついてこい」
「は、え？　ちょ、ちょっと、どこに行くんですか？」

男は無理矢理千姫の腕を掴むとそのまま歩き出す。千姫はもがくが、男の力は強く、千姫はなすがままに引きずられていった。やがて、千姫は諦めたように大人しくなり、そして、男の顔を見る。

千姫と、そう年はかわらなそうな顔立ちの青年。

先程まで返り血がついていた顔は、今は服で拭き取られていた。白い服が所々、朱に染まっている。

……この人は、平然と人を殺した。

その事が千姫に恐怖を抱かせる。

自分はこれからどうなるんだろうか？

最悪な想像ばかりが頭をよぎる。

……それでも、本当に何となくなんだけど、微かに千姫の中には安心があった。それが、その男の年が近いからなのか、自分が殺されるなんて漫画の中みたいなのが信じられないのか、良く分からないけど、なんだかこの男は大丈夫そうな気がした。

手当てもしてくれだし、良い人なのかもしれない。

先程、目の前で人を殺したのに？　自分も殺されそうになったのに？

千姫の中で二つの感情がぶつかり合うけど、自分の直感が告げている気がする。

この人は、大丈夫だと……。

そう考えた千姫は、自分の思考が最悪な予想を考えないように先程から黙り込んで黙々と歩いている男に話しかけることにした。

「……あの」

「なんだ？」

まだ厳しさが残るが、さっきとは違い、威圧感がだいぶなくなっ

た声で男は視線だけ、千姫に向けた。

千姫はその視線に一瞬だけ怯んだようだが、すぐに意を決したように口を開いた。

「……あ、あなたの名前は、何ですか!？」

千姫はそう言った後、後悔するように頭を押さえた。

「……………」

あー、もう！ 私の馬鹿！　なんで名前なんか聞いているのよ!？
とっさに話が浮かばなかったとしても、名前を聞くななんて……。
千姫がそんな事を考えている横では、男が怪訝そうな顔で千姫を見た。

「なんでお前に名前を名乗る必要がある？」

最もな正論を言われて、千姫は何も言えなくなる。

千姫は、いわば捕虜の分際なのだ。いつ殺されてもおかしくない。
そんな奴に名前を名乗る必要はどこにもない。しかし、千姫は自分から名前を聞いた手前、ひけなくて暫く思案していたが、突然思い付いたように、パアと笑顔になった。

「……ほら、名前知らないと不便だし」

「お前は捕虜だ。玖零の判断次第では即お前を殺す。名前を知らなくとも不便はない」

「あなたになくても私は不便なの！　それにほら、良く言うでしょ！　人の出会いは一期一会だって！　一生に一度会えるか分からないんだから」

千姫が強くそう言えば、男はポカンと呆然とした様子で千姫を見つめた。

「だから、あなたと私が出会えたのは何かの縁って、ことなんだから！ 名前を教えてください！」

呆然とした様子で千姫を見つめていた男は、千姫のその言葉を聞いて、堪えきれないように笑い出した。先程までの威圧感を放った人とは思えない程の無邪気な笑顔に千姫の心臓が大きく跳ねた。

「ははっ！ お前面白い事言うな。……まあ、お前の言うことも一理あるしな」

「じゃあ……っ！」

「弥澄だ。木暮弥澄。お前は？」

「千姫！ 朔原千姫です！」

千姫は明るい笑顔を浮かべて弥澄と名乗った青年に手を差しのべた。

弥澄は差し出された手にきょとんとしてから、ふっと表情を緩めて、千姫の手を握り返した。へへと楽しそうに笑う千姫に弥澄も穏やかな笑顔を向けた。だが、直ぐに厳しい顔つきに戻る。

「……でもまあ、まだお前が敵か味方が分からないしな。とりあえずは大人しくしてろよ」

「はい」

千姫は大人しく従い、弥澄の後をついていった。

弥澄は千姫のその態度に安心したのか、先程から離していた腕を再び掴まえる事はしなかった。

しばらく、歩けばお城のような大きな建物に着いた。

門の所には、強面の兵士みたいな人達が数名立っていた。

兵士達は弥澄を見ると敬礼してから、門を開けた。しかし、その瞳はどこか冷たく、また千姫を見る目も好奇の中に厳しさが混じっていた。数名の兵士が千姫達を見ながらこそそこそと何かを話していた。

なにこの人達、感じ悪い。

そんな事を千姫が思っていると前から、綺麗な銀色の髪に透き通るような銀の瞳のまだあどけない顔立ちの小柄な少年が駆け寄ってきた。

少年は千姫達の目の前で立ち止まり、花のように可愛い笑顔で微笑んだ。

「弥澄様！ お帰りなさいませ！ ……って、あれ？ その女は？」

少年の大きな銀色の瞳が千姫を映す。弥澄も少年に言われて、ああ、と頷いてから千姫に視線を移した。

「森で乞壬の国の奴等に襲われていたのを助けた。仲間かと思ったが俺達の隊服とは、微妙に違うし、敵か味方か分からないから、とりあえず連れてきた」

「へー。そうなんですか」

少年の瞳は千姫を見つめたまま。子供のものとは思えない程の鋭い眼差しで見つめられて、千姫は体を固くした。

「徠牙」

「はい」

「こいつを縄で縛ってから玖零の元に連れていけ。暴れないだろうが、念のためだ。俺は先に行って、玖零に事情を話しておく」

「わかりました」

徠牙と呼ばれた少年が頷くと、弥澄は満足そうにしてから、先に歩きだした。

徠牙はその背中を見送ってから、くると方向転換して、いつの間にか持っていた縄で千姫の腕を後ろ手に素早く縛った。

あまりに手慣れた手つきに千姫は、しばし呆然と徠牙を見つめた。一方、徠牙は千姫の視線など気にせず、手を縛り終えると、再びくると方向転換してから歩き出す。

「ほら、早く着いてこい」

子供とは思えない程の偉そうな態度に千姫は、少しムツとしたが相手は子供と自分を抑えた。そして、そのまま広い廊下をスタスタと先に歩く、徠牙の後を千姫も追う。しばらくして、千姫は前を歩く徠牙に話しかけた。

「ね、ねえ、徠牙君っていったけ？　いったい……」

千姫の言葉が途中で止まる。なぜかと言えば、話しかけた瞬間、目の前を歩く徠牙がピタリと足を止めて、千姫を振り向いたから。それも物凄く冷たい表情で……。

「……いま、徠牙“君”って言ったよね。あんた、僕の事を子供だと思って甘く見てるでしょ？」

「え？　べ、別にそう言うわけじゃ……」

あまりにも冷たい視線に思わず怯む。瞬間、目の前にいた筈の徠牙は消えていて、いつの間に抜いたのか徠牙の手には刀が。

そして、その刀の切っ先は千姫の首に当てられていた。あと、数

ミリでも動かせば千姫の首は斬られる程近付けられていた。その事に千姫は息を呑む。

「馬鹿にしないでくれる？ 子供だって人殺しくらい、簡単に出来るんだよ。いま、この刀を少しでも動かせば、あんたの命なんか簡単に消えるだろうね」

先程、弥澄に向けていたあの可愛いらしい笑顔の少年と同一人物とは思えない程、感情が読めない冷めた表情と冷たい声に千姫は何も言えずにいた。

徠牙の冷たい声と共に首筋の刀が少しだけ首に当てられて、当てられた所からは痛みが走り、血が流れた。

「……………」

しばらく、徠牙の冷たい視線が千姫を睨むが、不意に視線を逸らして、そのまま歩き出してしまう。千姫は、自分の首を触り、首がちゃんとある事を確認してから、ようやく安堵の息をついた。

「……早くしてくれる？」

もう大分先まで歩いてしまった徠牙の冷たい声が聞こえて、千姫は前を向く。

前を見れば、徠牙の冷たい視線に射ぬかれて、千姫の背中に寒気が走るが、いま着いていかなければ今度は本当に殺されそうなので、唇を噛み締めて、気を強く持ち、徠牙の後を着いていった。

無言のまま、しばらく歩けば、大きな扉の前についた。

徠牙は、その扉を二回軽く叩いた。

「鶴月です。女を連れてきました」

「入れ」

中から凜々しい男の声が聞こえて、徠牙は、失礼しますと声を掛けてから扉を開けた。

「弥澄から話は聞いている。で、その女は？」

「そこにいます。早く入れ」

徠牙に冷たい視線で中に入れてと言われて、千姫は恐怖を隠して、言われたように中に入った。

中に入った千姫の目に真っ先に映ったのは、柔らかそうな黒髪に意思の強そうな黒い瞳のやけに気品のある雰囲気の中でも整った顔立ちの美青年だった。その横には弥澄もいた。

男は、千姫を見た途端、ふっと口を緩めた。それを見た弥澄は、しまったとでも言うように、はんば呆れながら額に手をやった。

しかし、千姫にはその行動の意味も分からずに強張った顔で不安そうに瞳を揺らしていた。その時、椅子に座っていた気品のある黒髪の男が立ち上がり、真っ直ぐ千姫の元へ向かう。

その行動にこの世界に來た時から今までの経験からか、また刀を突きつけられるのかと思って、千姫は体を固くした。次の瞬間、感じたのは刀を突きつけられる感覚ではなく、優しく髪を撫でられる感覚だった。

「そんな不安そうな顔をしないで。可愛らしい顔が台無しだよ。まあ、不安気な顔も可愛いけど、やっぱり笑顔が見たいから」

予想していた展開と全く違う展開に今までこんなストレートな言葉を言われた事のない千姫はみるみる顔を赤くした。

「おや、赤くなってる。ふふ、可愛いね。俺は笠野玖零。可愛らし

い姫君。お前の名前は？」

「……朔原……千姫、です」

「千姫、か。可愛いお前にぴったりの名前だね。よろしく、姫君」

髪をさわっていた玖零が千姫の流れるように綺麗な艶やかな黒髪に優しく口付けをする。そして、そのまま目遣いで、真っ赤になって口をパクパクさせている千姫に向かってウインクをする。

とてつもない美形にそんな漫画みたいな事をやられて、千姫は茹でだこみたいに真っ赤な表情で玖零を見つめる。

「な、な、な、なぁーっ!？」

「ふふ。本当に可愛いね」

玖零が再び千姫に優しく微笑んだ瞬間、パンと良い音と共に玖零の頭が叩かれた。玖零は叩かれた頭を押さえて、頭を叩いた人物を勢いよく睨みつけた。

玖零の視線と同じように千姫も視線を動かす。

そこにいたのは、見事なまでの純白の髪を後ろで緩く縛っている青年だった。厳しさによって細められた夕日のように赤い紅の瞳は玖零を睨みつけている。その手には、大きなハリセンが……。

「い……ったいな! 何すんのさ!？ 悠緋!」

「いい加減にしろ、馬鹿王子。敵かもしれない奴を口説くな」

「仕方ないだろ。そこに天女のように美しい姫君がいたら、口説きたくなるだろ」

「どこをどういう風にとったら、仕方ないのか教えてほしいものだな」

悠緋と呼ばれた青年と、玖零の明らかに陰悪な言い争いに千姫は、

困ったように玖零と悠緋に視線を移してから、弥澄に助けを求めるような視線を向けた。弥澄は諦めろとでも言う風に首を横に振る。それに、千姫は愕然とした表情をした時――。

「玖零。悠緋も。喧嘩は止めてください。その人が困っているでしょう」

たしなめるような穏やかな声が聞こえた途端、言い争っていた玖零と悠緋の動きがぴたりと止まる。

天の助け――！

そんな思いのせいか、千姫は勢いよく声の主を振り返った。

そこにいたのは、ひだまりのように暖かいオレンジ色の髪に優しげなオレンジ色の瞳の穏やかな雰囲気青年だった。

千姫には、きっとその青年の後ろに後光が差してるように見えただろう。……けど、だけど、その青年の穏やかな微笑みに玖零と悠緋は、石のように凍りつき、滝のような汗を流す。

もちろん、弥澄と徠牙は自分に火の粉が飛んでこないように他人のふり。しかし、そんな異様な雰囲気千姫は感動のあまりか気付いてなかった。

「……と、都架也。悪かったよ。反省してる」

「すまない」

「おやおや、なんだか喧嘩を止めた僕が悪者みたいになってるじゃないですか？ 全く酷いですね」

にこにこ笑いながら、そんな事を言う都架也と呼ばれた青年の態度に、さすがに千姫も周りの異様な雰囲気気付いたのか、再び困ったように考え込む。

「……さて、お遊びはここまでとして。……ええと、千姫さん？」

で、よろしかったですか？」

「あ、はい！ 朔原千姫です」

「僕は那賀^{なかくしとかや}櫛都架也と言います。以後、お見知りおきを」

「はい」

千姫が元気よく、そう返せば、都架也は、ふふっと優しい笑みを浮かべながら、手の縄を解いてくれた。

……それにしても、この世界は美形しかないのかな？

思わず、千姫がそう思うほど、この世界に来てから、出会う人達が格好よすぎる。

弥澄も徠牙も玖零も悠緋も都架也も……。

……本当に漫画みたい。漫画のお約束。登場人物は、皆美形！
みたいな……。

自分の考えに思わず、苦笑する千姫の横で、やっと、玖零が不敵な笑顔を浮かべた。

「……で、都架也はどうしたのさ？」

「ああ、僕も弥澄殿と同じですよ。服が乞^{こつみ}壬の国の隊服にそっくりで、でも微妙に違う怪しい人物を見つけたんで、玖零に判断してもらおうと……」

「なるほど、ね。……で、そいつは？」

「あちらにいます。ちよっと呼んできますね」

都架也は、そう言って指を差した部屋に向かう。

……私と同じような怪しい人物。それってさ、もしかして……。千姫がそう思ったのと同時に都架也が向かった部屋の扉が開かれて、中からは、千姫がよく知っている人物が現れた。

めんどくさそうに緩んだ瞳は千姫を映して、厄介そうにため息をついた。対して、千姫は驚いたように大きく口を開けて、その人物を指差した。

「と、迅！？」

「……………」

千姫に指を差されて、名前を叫ばれた迅は、めんどくさそうに眉をしかめて、しばらく考えた表情をしてから、いつもの仏頂面で……。

「あー、人違いです」

「何言ってるのよ！ どこからどうみても迅でしょ！」

千姫が迅に歩み寄ると、迅はあからさまに顔を逸らしながら、

「だから人違いだって……」

「まだ言うの！？」

千姫はめんどくさそうに視線を逸らす、迅の頬を引っ張り、強い眼差しで迅を睨んだ。それに迅は、ハアと小さくため息をついてから、ようやく千姫を見た。

「んで、千姫もいるって事はやっぱり夢じゃないんだ。……ハア。めんどくさ」

「うん。夢じゃないみたいね。まだ、信じられないけど……。でも、それよりも」

ふと、千姫の視線が迅から周りに移される。迅も千姫と同じように周りに視線を移す。

そこには、ジーツと千姫達を見つめる弥澄達の姿があった。まだ、敵か味方か分からない千姫達を見定めるかのように鋭い瞳を千姫達に向ける。その瞳には、どこか敵意を隠しているような気がする。

「東の森で迷っていた所を僕が見つめました。乞壬の国の隊服を着ていたので斬ろうと思ったんですか、微妙に違うみたいなので、とりあえず、連れてきました」

都架也が迅を見ながら、そう説明すると、玖零は興味深そうに迅の全身を見てから、千姫の全身も見る。

「……なるほど、ね。ま、冗談はここまでにして」

「……絶対冗談じゃなかったくせに。あれ、本気で口説いてたぞ」
「そうですね。僕も弥澄様の言う通りだと思います」

弥澄と徠牙の言葉は、玖零によって見事に黙殺される。その事に少しだけ、不満そうな顔をする二人だが、再び千姫達を見つめた時の瞳は鋭い。

千姫がその事に体を固くした直後、鋭い音と共に首に刀を突きつけられた。刀を突きつけたのは、玖零。

玖零には、先程までの柔らかな雰囲気はなく、千姫達を見定めるかのように鋭い瞳で千姫達を見つめていた。

「……それで、あんた達は何者？ 乞壬の国の間者？ 正直に答えろ」

「……わ、私達は……」

声が震える。声だけじゃなく、千姫の体自体が震えていた。

元々、普通の高校生として平穏に過ごしていた千姫にこんなに敵意をむき出しの殺気を浴びた事はないのだ。なのに今は、千姫を取り囲む無数の殺気がある。それに言葉が出てこない。体が硬直して、何も出来ない。

そんな時、千姫を庇うように横にいた迅が千姫の前に立ち塞がっ

た。

「……と、し？」

「……はあ。本当にめんどくさい事になったな」

千姫を庇った事により、玖零の刀を自分の首に当てられたというのに、いつも眠そうに緩んだ瞳は、普段と何ら変わらずに刀を見つめた。

「……あんたら、俺達を何者って言うけどさ、俺達だって、あんたら何者って聞きたいんだけど？」

「なんだと？」

迅の言葉に弥澄がピクリと反応した。それに迅は、いつものめんどくさそうな雰囲気のまま弥澄に視線を移した。

「だって、そうだろ。俺達だって自分達に何が起こったのか未だによく分からないのに、突然変な所に連れてこられて、刀を突きつけられて、何者って……。意味分かんないし、あんたらこそ誰だよ」

「何者か聞いているのは、こっちだ。あんたの下らない戯れ言なんかに答える必要ないね」

「……戯れ言、ね。じゃあ、俺もその下らない戯れ言に答える必要はないね」

刀を向けられ、無数の殺気を浴びても迅は毅然とした様子で怯む事なく、真っ直ぐ玖零を見つめ返した。それに玖零は、迅を見定めるように見てから、不敵に笑った。

「ふーん。答える気がないんだ？ ……じゃあ、ここで死んで」

その言葉と同時に玖零の刀は迅に向かって振り下ろされた。それは、迅が避けられる筈もなく……………。

しかし、玖零の刀はいつの間にか刀を持っていた迅によって防がれた。

「なっ！」

それに玖零は驚いたように一步後ろに下がる。迅はというと、恐怖で委縮してしまった千姫を背中中で庇いながら、千姫に向かって、いつものだるそうな口調のまま言った。

「ちょっと、千姫。何これくらいの事で固まってるの？ あのやかましい程の気の強さはどうしたんだよ？ まさか、千姫がこれくらいの事で、へこたれる事なんてないだろ？」

迅のその言葉は、恐怖に震えていた千姫の心を強く揺さぶった。床を見つめていた視線は、ゆっくりと上に移動していき、迅を見る瞳は先程までの恐怖の瞳ではなく、いつもの気の強い千姫の瞳だった。

「当たり前でしょう。私がこれくらいの事で…………。でも、そうね。確かに私らしくなかったね。ありがとう、迅」

千姫の言葉に迅は、何も言わないが口には微かに笑みを浮かべていた。千姫は真っ直ぐ玖零を見つめて、強く凜とした口調で言い放った。

「私達の話も聞いてください。信じてもらえるか分かりませんが、それでいいなら包み隠さずお話します」

「ふーん。でも、お前達の話信じるなんて、よっぽどの事がない

限り、無理だね」

「私達が話したとしても、信じてもらえる可能性は少ないと思います。……でも、話だけは聞いてくれませんか？」

「嫌だと言ったら？」

玖零の冷たい視線に怯む事なく、千姫は真っ直ぐ玖零を見つめ返した。

「だったら、今すぐその刀で私を斬り伏せばいい！ 私は逃げたり防いだりもしない！ ……さあ、やりなさい！」

あまりにも毅然とした態度で言い放つ千姫に弥澄達は呆氣に取られたように静まり返る。その中でも、玖零だけは不敵な笑顔を浮かべていた。

「ふーん。なら、ばいばい」

ヒュッと素早く刀が振り下ろされた。しかし、千姫は言った通り避けようともせず、目も瞑らずに、ただ真っ直ぐ玖零を強い瞳で見つめていた。

玖零の刀は、寸分の狂いもなく千姫の頭に目掛けて振り下ろされ……。

本当にあと数ミリ深ければ千姫の頭を切り裂いていた程ギリギリの所で止まった。

千姫は、それでも目を閉じることなく真っ直ぐ玖零を見つめていた。玖零は、ふっと笑ってから困ったような笑顔を浮かべて、刀を鞘に納めた。

「……本当に動かないとはね。……うーん、仕方ないからその根性を認めて、話だけは聞いてあげるよ」

やれやれと言うように呆れたため息をつく玖零に千姫は、パアツと明るい笑顔になった。しかし、その千姫の頭を後ろから迅が叩いた。

「いったあ！……何すんのよ！？」

「何すんのよ？　じゃないだろうが、この馬鹿千姫！　誰がそこまでやって言った！　こっちの心臓が止まるかと思っただろ！」

「あはは、ごめん。つい……」

「つい……。で、済むか馬鹿！　つい、で死んだらどうすんだ！　この大馬鹿！」

迅の剣幕な表情に千姫も少し反省したように項垂れた。そんな千姫の様子を見て、迅は呆れた表情でため息をついた。その時――。

「兄様！」

そんな声が聞こえて、迅と千姫は不思議そうに、玖零はビクツとした様子でおそろおそろ声の主を振り返った。

そこに立っていたのは、女神のように美しい少女だった。腰まで伸びた、さらさらストレートの淡い桜色の髪と同じ淡い桜色の瞳で少女は、玖零を睨む。玖零はやけにひきつった笑顔で少女を見つめた。

「は、白桜。そ、そんなに目を吊り上げたら可愛い顔が台無しだよ」
「余計なお世話です！ それより兄様見てましたよ。いくら敵かも知れないからって無防備の相手にいきなり刀を突きつけるなんて！」
「……まあ、落ち着け。白桜。俺は、玖零のしたことは正しいと思うぞ？」

弥澄の言葉に白桜と呼ばれた少女は、玖零から弥澄に視線を移した。白桜の強い視線を受け、弥澄は、うっと身構える。

白桜は、強い眼差しのまま弥澄を見つめるが、そのうち、ハアとため息をついた。

「……そんな事くらい私だって分かってます。敵かも知れない人に情けをかけたらこちらがやられる可能性があるから……。でも……」

しゅん、とした様子の白桜の頭に玖零が優しく手をおいた。

「お前の言いたい事は分かる。でも、俺はこの国を第一に考えなきゃいけない」

「……そう、ですね。我儘言っでごめんなさい」

頭を軽く下げて謝り、顔を上げた時に突然の事に呆然としていた千姫と目が合った。その事に少しだけ頬を朱に染めて、白桜はふわりと微笑んだ。

「見苦しい所を見せて、ごめんなさいね。……私は、筑炉規白桜。つくろぎはくおう

白桜って呼んでね」

「あっ、朔原千姫です！」

白桜の美しさに見とれていたのか、慌てた様子で千姫は名を名乗った。

それに白桜は、優しく微笑んだ。

「……さて、大分話がずれましたし、本題に入りましょうか。玖零」
「ああ、そうだね。じゃあ、姫君達の話聞いてあげるよ。話して
ごらん」

何を考えているか分からない笑顔で、千姫達に視線を向ける玖零。
それに、千姫は居住まいを正してから、軽く咳払いをしてゆっくりと話し出した。

大体は千姫が話すのだけど、時々、捕捉のように迅がめんどくさそうに付け加える。千姫達の話聞いていく内に段々と弥澄や玖零達の表情が陰しくなる。

何かを考えるように顔をしかめる。他の人達も信じられないというような表情で、黙って話を聞いていた。

一通り話終わり、千姫はちらりと辺りを見渡す。

……信じてもらえる訳ないよね……。自分だって、まだ信じられないのだから。

「……つまり、要約すると、お前達はこことは別の世界から来て、普通の高校生だったから、この世界の事もこの国の事も何も分からない無関係の人間だと言うことか……。信じられないな」

「そうですね。話としては面白いですけど、実際にとなると……」

厳しい顔付きの悠緋の言葉に都架也も考え込むような表情になる。

「ま、信じられなくて当然だろうね。当事者の俺達だって、未だに信じられないんだから。……本当に夢なら良いのに、めんどくさい」

ハア、と疲れた様子でため息をつく迅に千姫も困ったように表情を曇らせた。

「確かに信じられない話だが、俺にはそいつらが嘘をついてるようには見えないぞ」

「そう、ですね。まあ、世の中には僕達が知らない事も沢山ありますし、異世界から……というのも、あると思います」

「真っ直ぐな綺麗な瞳をしているもの。嘘をついているとは思えないわ」

あまり信じていない悠緋、都架也に対して、意外にも肩を持ってくれたのが、弥澄、徠牙、白桜だった。

「……信じて、くれるんですか？」

ぽあっと、千姫の表情が明るくなる。それに白桜は優しく微笑んで頷いた。

「……戦姫物語」
せんひめものがたり

「え？」

ぽつりと呟いた玖零の言葉に千姫は思わず聞き返した。しかし、玖零は何か思案している様子で黙り込むだけだった。

「そうですか。……確かにそれなら納得できるような気がしますね」

「だが、あれはただのお伽噺だろ？」

「お伽噺とは限らないじゃない？ 伝説なんだから、本当の可能性だってあるよ」

お伽噺だと信用していない悠緋に徠牙は子供のものとは思えない程、凜とした口調でそう言った。

「戦姫物語って何？」

「俺が知ってる訳ないだろ」

千姫は隣にいる迅に聞くが、迅は呆れた表情でそう返した。

「戦姫物語とは、昔から伝わっている誰もが知っている程有名なお話よ」

白桜がそう言って、ゆっくりと話し出した。その内容は、こうだった。

天と地の二つの国が争い、国滅びると言われた時、異世界から一人の少女が降り立った。

少女は気高い皇族の血を引く者で本来ならば護られる筈の立場の者だった。

少女は大切な者を護るために自ら刀を持ち、手を罪に染めながらも怯む事なく、容赦なく敵を斬っていく。

そのあまりの強さと容赦のなさには人々は恐怖した。しかし、返り血を浴びてもなお、毅然とした様子でどこか神々しさを感じる少女を人々は、こう言った。

“戦姫”と――。

やがて、少女の活躍により戦には終止符が打たれたが、不思議な力を使う者達の登場により、国は再び戦場になった。

そして、少女は自ら不思議な力を使う者と戦い、見事に勝利をした。

自らの命と引き換えに――。

大切な者を護るために自らの命も省みずに戦った少女の哀れで悲しい物語。

これがそのお話よ、とゆっくりと語った白桜に対して、迅は本当にお伽噺だな、と小さく呟いた。

けれど、千姫の胸にはお伽噺と考えるよりも先に悲しいという感情が浮かんできた。

大切な者を護るために自らの命を犠牲にした戦姫は、一体どういう気持ちだったのだろうか？

大切な人を護れて、嬉しかったのかな？ それとも……。
なんだか、胸が妙にざわついた。

「……まあ、お伽噺だろうと、なんだろうと、こいつらがこことは別の異世界から来たって事は信用してやってもいいんじゃないか？」

「そうだね。まだ、完璧に信じた訳じゃないけど……。ま、こんな可愛い姫君が嘘をつく筈がないしね」

ふっと、話を変えるように言った弥澄の言葉に玖零も柔らかい雰囲気に戻り、笑った。

「それじゃあ……っ！」

千姫の顔が、パアッと明るくなった。玖零は優しい微笑みを浮かべた。

「まあ、完璧に信じた訳じゃないから、監視ということで、しばらくここで暮らしてもらうよ」

その言葉に迅は怠そうに口を挟んだ。

「そんなことより、俺達は帰る方法を探したいんだけど。あんたら

は何か知ってるの？」

「残念ながら何も」

「そう言うわけで君達は、帰る方法が分かるまで、結局はここにいろしかないんですよ」

穏やかに微笑んでいる都架也の後ろに黒い気配が見えるのは、きつと気のせい……のはず。

「じゃあ、まずは改めて自己紹介としようか。俺は笠野玖零。この華籠の国の王の第一子。つまりは王子だ。まあ、そんな事は気にしないで接してよね。よろしく、姫君」

パチンとウインクをする玖零に千姫は顔が赤くなりながらも頷いた。

しかし、すぐに何かに気付いたかのように顔が真っ青になっていく。

「お、おお、おおお、王子様ーっ!？」

「うるさい。耳元で叫ばないでよ。しかも、別にそんな驚く事じゃないだろ」

玖零に向かって、指を差して口をパクパクさせながら驚く千姫の横では、うるさそうに耳を抑えている迅がぶっきらぼうにそう言った。しかし、そんな千姫の驚きも無視して、玖零はそのまま自己紹介を続ける。

「そして、姫君を連れてきた男が、木暮弥澄。この国随一の最強剣士だ」

「よろしくな」

先程迄の冷たい眼差しをしていた人と同一人物とは思えない程の無邪気な笑顔で笑う弥澄。そんな弥澄がこの国随一の最強剣士と言われてもあまり信用出来ない。

「それで、こいつが鶴月徠牙。子供かと思って甘く見ると痛い目にあうぞ。徠牙はそこらの大人じゃ勝てない程の剣の腕前をしてる。でも、頭も天才的だ。この国の軍師をしてもらっている」

「……………」

キツと敵意の眼差しで見られるのは、きっと先程の出来事のせいなんだろう。

すいません、もう痛い目にありました……。

心の中でそう思いながら、未だに睨み付けている徠牙にとりあえず、会釈をした。

「それで、この一見穏やかそうな雰囲気の方が、那賀櫛都架也」

「よろしく願いますね。……ところで、玖零。一見穏やかそうな雰囲気とはどういう意味なのか、是非聞かせてほしいですね」

「……都架也は絶対に怒らせるなよ」

弥澄に耳打ちでそう言われて、千姫は穏やかに微笑みながら背後には黒いオーラを出している都架也を見て、頷いた。

玖零の顔は少々引き吊っていたけれど、玖零はそのまま紹介を続ける。

「そして、こいつは、筑炉規白桜。俺の妹だよ」

「改めて、よろしくね。千姫」

「うん！ ……って、玖零さんの妹！？」

ニコッと微笑まれて、思わず笑い返すが、すぐに驚きの表情に変

わる。つい、玖零と白桜の顔を交互に見てしまう。

確かに少し、似てるかも。特に、物凄く美形という点では……。

「あれ？ でも、なんで名字が違うの？」

「名字？ ……ああ！ 私達の国ではね、男は父方の姓を、女は母方の姓を名乗る事になっているのよ」

白桜の説明に、なるほどと納得するが、すぐに変なのと思いたおしたのだった。

「さて、これで全員紹介したね」

そう言って笑う玖零の頭が再び、スパアンと気持ち良い程に見事な音と共に叩かれた。もちろん、叩いたのはハリセンを持った悠緋で……。

「堂々と俺を抜かすなんて、良い度胸じゃないか。馬鹿王子」

「さあね。何の事か俺にはさっぱり分からないよ。それより、あんた誰？」

「ふん。馬鹿王子は本当に無能だな。人の名前もろくに覚えられないなんて、猿以下じゃないのか」

「残念。俺は一度見た美人は忘れないんだよ。まあ、野郎なんぞ、興味ないから即行消去するけどね」

「女を追いかける事しか出来ない猿以下の分際が何をぬかす。呆れものも言えないな」

「じゃあ、黙ればいいだろ。永久に」

他人に口を挟む隙を与えない程、厳しい言葉の言い争いを続ける玖零と悠緋。

二人の間に、電撃が飛び交ってるように見えるのは、気のせいじ

やないはず。しかし、周りの人はいつもの日常として見ているのか、誰も止めようとしなかった。

「すみませんね、千姫さん。あそこで、玖零と喧嘩しているのが、はたのゆうひ秦野悠緋ですよ」

都架也が穏やかに微笑みながら、そう言って悠緋の名前を教えてくださいました。

「……では、改めて名前を教えてくださいますか？」

「あ、はい！ 朔原千姫です！ これからよろしくお願いします。そして、こっちが……」

ちらりと横目で見れば、退屈そうに欠伸をしている迅の姿が目に入った。

千姫が軽くパシッと迅を叩けば、迅は眠そうな表情のまま、千姫の睨みを受け流した。

「私の幼馴染みの玖裳南迅です」

「……どうも」

どうしても良さそうに挨拶をする迅に千姫が肘打ちを入れようとするが、迅は平然と避ける。

その事に少しだけ、ムツとした千姫だが、それ以上は何もやらなかった。

「……とりあえず、向こうへ行って、ちゃんとその怪我を手当てしましょう。弥澄さんが応急処置をしてくれたから、血は止まってるけど、念のため」

白桜に指差された所は、ここに来た当初に斬られた腕。

そんなに傷は深くなかったし、手当てをしてもらったので血はもう止まっていた。しかし、色んな事が有りすぎて怪我の存在を忘れていたけど、今更ながら思い出せば、痛みが甦ってくる。

痛みを堪えながら、白桜に案内されるまま、部屋を出ていった。

千姫達が出ていった後の部屋では、玖零達の妙に真剣な表情があった。

伝説に謳われた戦姫の物語。

それと似たような状況に一人の少女が戦姫と同じように異世界から現れた。

それは、戦を終わらす希望の光なのか。

それとも、破滅をもたらす絶望の闇なのか。

千姫の存在は、この物語にどう影響を及ぼすのか。

それを知るものは、誰もいない。

そう、誰もこの先に待ち受けている運命を知らない。

運命の歯車は、どう回っていくのか。

ゆっくりとゆっくりと歯車が動き出す。

刻が来たとも言うように運命という名の歯車が動き出す。

全ては、誰かが書いた筋書き通りなのか。それとも……。

これからの千姫の動きが運命を決めるのか。

この先に待ち受ける悲惨な未来に千姫は絶望せずに、希望を持っているのか。

沢山の人の思惑が交差するこの世界の歯車は、どんな風に廻って

いくのか。

全ては謎に包まれたまま、物語は幕を開ける――。

第二話 華簾の国

チチチツと小鳥の心地よいさえずりに千姫は、ゆっくりと目を開く。窓から入ってくる朝日が眩しくて、思わず布団にくるまる。

その時、コンコンと扉をノックする音が聞こえて、失礼しますと言う声と共に扉が開かれて、一人の青年が入ってきた。

薄い栗色の髪に髪と同じ色の栗色の優しさが窺える瞳。青年は穏やかな笑顔を浮かべながら、ゆったりとした口調で千姫に話しかけた。

「千姫様、おはようございます。朝食の準備が整いましたので、起こしに参りました。さあ、起きてくださいませ」

「……っ、んー」

青年の言葉に布団にくるまっていた千姫は、もそもそと動き出して、布団を剥いで、んー、と大きく伸びた。

「おはようございます」

「あ、おはようございます。奏さん^{かなで}」

千姫がそう言えば、奏と呼ばれた青年は、穏やかな微笑みを浮かべた。

突然、この世界に来てしまった千姫と迅が帰る方法が見つかるまで置いてくれると言う玖零の好意に甘えて、この——華簾の国に世話になってから、早一週間が立った。そして、そんな千姫の世話係になったのが、この目の前にいる奏だった。

「今日から千姫様の世話係をさせて頂く事になりました。風桐院奏ふうとういんかなでと申します。これから暫くの間、よろしくお願いしますね」

そう言つて、穏やかな笑顔で頭を下げた奏に対して、千姫も慌てていた。ただでさえ、敵かも知れないと思つていた千姫達を置いてくれるというのに、さらに世話係まで、と千姫は両手と首をぶんぶん横に振った。

「いいです、いいです。お気持ちは嬉しいですが、そんなに面倒をかけるわけにはいけないので……」

しかし、そんな事を言う千姫を奏は悲しそうな顔で見つめ続けて、結局千姫が折れたのだった。

「千姫様？ どうなさつたのですか？ 何か考え事をしているようですが……」

「あ、ええと、何でもないです！ それより、その千姫“様”って止めてくれませんか。私は、そんな大した者じゃないですし」

「それは出来ません。千姫様は玖零様の大切な客人です。失礼のな

いように接しろと言われておりますので」

口調は穏やかだけど、その奥にはこれは譲らないという強い意思が伝わってきた。それに千姫は困ったように眉を下げた。

初めて出会った時から、何度も言っているが、いつも同じように返答されてしまい、さすがに千姫も諦めざるをえなかった。

千姫が少しだけ考え込んでいた時、ぐーっとお腹の音が鳴った。奏はそれに一瞬だけ、きょとんとした表情になるが、直ぐに優しく微笑んだ。対して、千姫は顔を真っ赤にした。

「ち、ちがうんです、これはちがくて、これは、ええと……」

両手を激しく横に振って、言い訳を考えるも思い付かずしどろもどろになる。

「では、そろそろ朝食に行きましようか。多分、皆様もう揃っていると思いますので」

「はい！」

千姫は大きく頷くと、上機嫌で奏の前をスキップしながら歩く。そんな姿を奏は微笑ましく思い、優しい瞳で千姫を見ていた。ふと、視線を床に移せば、床には何かが落ちていた。

奏はそれを不思議そうに拾う。それはネックレスだった。

緑色の四葉のクローバーの形をしているネックレス。奏はそれをしげしげと見つめて、前を上機嫌で歩く千姫を呼び止めた。

「これは、千姫様のですか？」

不思議そうに振り返った千姫にネックレスを見せれば、千姫は驚いたように目を見開いて、勢い良く奏に歩み寄った。

「私のです！ ああー、ありがとうございます！ 本当に助かりました！ このご恩は一生忘れません！ 本当にありがとうございます！」

目を輝かせて、奏の両手をぶんぶんと振り、お礼を言う千姫に奏は少しだけ驚くがすぐに苦笑した。

「そんな大袈裟な。……それは、そんなに大事なものなんですか？」「はい！ ……記憶にないくらい小さい頃から片時も離さずにつけていて、凄く大事なんです！ 覚えてないけど、大切な思い出でもあったんだと思います」

にこやかに微笑む千姫の笑顔に本当に大切なものなんだな、と奏は心の中でそう思った。ポケットにいれておくと危ないなー、と言いながらネックレスを首につける千姫。ネックレスはセーラー服の中に入ってしまった、見えなくなった。

「さ、行きましょう」

千姫と共に再び奏は歩き出した。

このお城のように広い建物……いや、実際にお城だが……。とにかく、そんな広い建物の間取りを覚えてる訳もなく、先を歩く千姫は直ぐに困ったように後ろを歩く奏を振り返る。

奏は優しく微笑んでから、こちらですよと案内をしてくれた。しばらく歩けば、大きな扉の前につき、奏はどうぞと千姫を促した。扉を開ければ、華籠の国の幹部の人達が勢揃いしていた。だが、いま目の前にいる人達は、とても華籠の国の幹部とは思えない程、大騒ぎしていた。

「もう一度言ってみな？　いま、なんて言った？」

「馬鹿王子は言葉も分からないのか？　全く無能だな、そう言ったんだ」

「俺が無能なんじゃなくて、あんたの言葉が可笑しいんだよ。大体それは何語？　阿呆語？　馬鹿語？」

「その言葉はそっくりそのまま返さしてもらおう。むしろ、馬鹿語はお前だろ。“馬鹿”王子」

バチバチと険悪な雰囲気で他人に口を挟む隙を与えない程の言い争いを続ける玖零と悠緋の横では、呆れた表情の都架也がいた。都架也の前には、我関さずな様子で楽しそうに食事をとる弥澄と徠牙の姿があった。

「それにしても、相変わらず朝食から豪華だよな」

「そうですね！　でも、朝は1日の始まりですから、これくらいで充分だと思います！」

「そうなのか？」

「そうですよ！　……ん、これ、美味しいですよ！」

「ん？　どれだ？」

「これですよ、これ」

そんな凄い仲の良さげな雰囲気の二人の間にも他人が入り込める隙間はない。

「あら、千姫。おはよう」

入口から呆然と中の様子を見ていた千姫に白桜が挨拶をしてきた。それによりやく呆然としていた千姫もハッとして、笑顔で返す。

「おはよう！　白桜」

「ふふ、朝から元気ね。奏さんもおはようございます」

「おはようございます。白桜様」

白桜は優しく微笑みながら、千姫の後ろで周りの様子を穏やかに見守っていた奏に声を掛ければ、奏は丁寧にお辞儀をした。

「おはよう、姫君。今日も可愛いね。朝日さえ、姫君の前では霞む程にね」

「な、なな!？」

いつの間にか悠緋との喧嘩を打ちきって、千姫の側に来て、恥ずかしい台詞を言う玖零に千姫の顔は朱に染まる。

「顔が真っ赤だよ。本当に可愛いね」

耳元に甘い声で囁かれて、千姫は口をパクパクさせながら、凄い勢いで後ろに下がった。玖零はそれを見て、さらに笑みを深めた。

「姫君は本当に誘い上手だね。そんな風に逃げられたら、追いたくなるじゃないか」

一步、玖零が踏み出した瞬間、突然玖零の頭が後ろから叩かれた。それと、同時に千姫の体は強い力で後ろに引っ張られた。もちろん、玖零の頭を叩いたのは、ハリセンを持った悠緋。でも、千姫を引っ張ったのは……。朝のせいなのか、それとも全く別の何かのせいなのか、物凄く機嫌の悪そうな迅だった。

「……と、迅？ おはよう」

「……………」

千姫が恐る恐ると言った様子で迅に声を掛ければ、迅は不機嫌な表情のまま、千姫を見つめて、それから不意に視線を逸らして、そのまま席に着いて、食事を食べ始めた。そんな迅の様子に千姫は訳が分からなそうに表情を困惑させた。

「さあ、千姫様も席にお着きになってください。でないと、そろそろ弥澄様達に食べ尽くされてしまいますよ」

「ああっ！」

奏の言葉に弥澄達に視線を移すなり、千姫は声を上げた。視線の先には、既に量が僅かしか残っていない料理とそれに手を伸ばす弥澄達の姿が映った。

「ちよっ！ 私の分が無くなるじゃないですか！」

千姫も慌てた様子で席について、両手を合わせて、いただきますと言ってから、料理を食べだした。そんな様子を見て、奏は優しく微笑みを浮かべた。

朝食を食べ終わり、千姫が寛いでいる所に都架也が近付いてきた。

「千姫さん。この城に来てから、もう一週間程経ちますが、まだ外に出たことはありませんよね？ ……どうですか、外に出たくないですか？」

「えっ？ 出ても良いんですか？」

都架也の言葉は、千姫にとって、凄く喜ばしい事だった。外に出れば、元の世界に戻る方法が分かるかもしれないし、なにより、自分の見たことない、知らない世界なのだ。

不謹慎かもしれないけど、やっぱり楽しみたい。それにこの世界の事を知りたい。だから、外に出れるというのは、一種の希望みたいなものだった。

「僕達と一緒にですけどね。勿論条件もありますよ。勝手な行動をとらない事。僕達の言うことを聞く事。そして、逃げようとする事。この三つを守ってくれるのでしたら、市くらいまでなら外出を許可するというのが、玖零からのお達しでした」

「勿論守ります！」

勢いよく即答した千姫に対して、都架也は一瞬、驚いた顔をするが、直ぐに穏やかな笑みを浮かべたのだった。

それから、時刻は過ぎて、太陽も真上に昇っている昼。外は心地よい日だまりの暖かさに涼しい風が吹いていた。

朔原千姫は、久し振りの外の空気を満喫していた……………
……………訳でもなく、窓から見える外の明るさを羨ましそうに見ながら、大量の本の中で色々と読み漁っていた。

場所は、城の書庫。何故、こんな所で大量の本を読んでいるのかというと…………。

「…………ただし、千姫さんはこの世界についての知識が全くありません。この国は今平和ですけど、どこに乞壬の間者が紛れているかわかりません」

都架也が穏やかな声でそう言えば、外に出られる嬉しさでご機嫌な様子の千姫の動きがピタリと止まり、不思議そうに首を傾げながら、都架也の話に耳を傾けた。

「ですから、千姫さんには少し知識を蓄えてもらおうと思います。勿論、それまで外出は禁止です」

ニツコリと黒い笑顔で微笑む都架也に千姫は、一気に天国から地獄に落ちた気分になった。

黒い笑顔の都架也は、反論を許す余地を与えずに千姫は、こうして城の書庫で知識を蓄えていたのだった。しかし、この書庫には大量の本があり、この華籠の国の資料を探し出すのが、一苦労だった。本の背表紙に書いてあるタイトルを心の中で読み上げながら、視線を滑らしていく。

人間の心、初めての子供の育て方、名前の付け方、刀の作り方。と、明らかに変な物が沢山あり、千姫は苦笑しながらそのまま、めぼしいものがないか、視線を滑らせた。

戦の全て、楽園ももう一つの世界、神の降臨、神の全て。そこで、千姫は、視線を滑らす中に綺麗な青色が表紙の本が目に入り、思わず手に取った。

そこには、【楽園ももう一つの世界】と書いてあった。千姫は、ペラペラとページをめくる。どうやら物語みたいだ。

異世界から呼び出された一人の少女がそこで出会ったかけがえの

ない仲間と共に、その世界を支配していた神を止めるために戦う物語――。

なんだか異世界からって、私達みたいだ。まあ、私にはこんな風に正義のヒーローみたいな事はできないけど……。

千姫は苦笑しながらも、ページをめくる。そして、不意に本を閉じる。

また、暇な時にでも読もうかな。そう思って、再び本棚に視線を滑らした。

他にも、視線を滑らしている間に目に止まった数冊の本も千姫は、後で読もうと思い、本棚から取り出していた。

なんだか、いつの間にか面白そうな本探しになっていた事に気が付き、慌てて本来の目的の資料を探しだした。

書庫に籠ってから、どれくらいの時間が経ったのか、気が付いたら、窓から差し込む光は、優しい夕日色だった。そこで、何冊か見つかった資料を手にながら、未だに本棚に視線を滑らしていたら、気になる文字が目に入った。

【戦姫物語】

堂々と書かれていたその文字に目を奪われたようにただ呆然と見つめていた。

ドクン、ドクン、と鼓動が妙にうるさい。なんだか、胸が締め付けられるようだった。そして、導かれるようにゆっくりと手を伸ばす。その時――。

「おい、そろそろ本読み終わったか？　それとも、まだ見つかってないのか？」

明るい声と共に弥澄が現れた。

「え？ ……わっ!？」

突然の出来事に脚立に乗っていた千姫は、驚いたようにバランスを崩して、そのまま持っていた本ごと大きく揺らいだ。

倒れるっ！

そう覚悟して、次に来るであろう衝撃に備える。……が、いつまで経っても衝撃はこない。代わりに誰かに支えられてるような感覚があった。

反射的に瞑っていた目をゆっくり開けば、目に入っただのは綺麗な灰色の髪だった。

「いってー……」

弥澄が小さく唸る。その声に我にかえったように千姫が弥澄に視線を向ける。

「ご、ごめんなさい！ だ、大丈夫……です……か？」

千姫の声が段々と途切れていく。呆然としたように視線を向ける先には、当然だが弥澄がいる。だが、弥澄は。肝心の弥澄の姿は……。

千姫を庇った事により、千姫の持っていた本が見事に弥澄にクリンヒットして、さらには頭の上には一冊の本が開いた状態で見事に乗っていた。

本に埋もれた弥澄は、本がぶつかった所が余りにも痛かったからか、少しだけ涙目で、そんな様子がなんだか可愛くて、それでいて面白かった。堪えきれずに嘔き出した千姫に対して、弥澄は心外そうに顔をしかめた。

「おまえな、助けてもらったくせに笑うなんて、失礼だぞ」
「ご、ごめん……な……さい。わ、笑うつもりは……なかったん……
…ですけ……ど……」

謝りながらも必死で笑いを堪えているせいか、声は震えて、言葉も途切れ途切れだった。弥澄は半眼で千姫を睨むが、未だに本が頭に被ったままなので、迫力がなく、むしろその様子がさらに千姫のツボをついたらしく、笑いは一向に止まろうとしなかった。

ひとしきり、笑った後は、笑いすぎで出た涙を拭いながら、千姫は弥澄の頭に乗っていた本を取った。それに弥澄は驚いたように目を瞬いた。

「なっ!?! 頭が何か重いと思ってたら、本が乗っていたのか!」
「気付いてなかったんですか?」

当然だ、とばかりに頷かれて、再び千姫は笑う。一番最初は、恐怖を覚えた弥澄だがこの一週間過ごす内に段々と打ち解けられた。最初の頃に比べれば、進歩したと思いつながら、千姫は弥澄に向き直る。

「お礼が遅くなりましたけど、助けてくれてありがとうございます
た」

丁寧に頭を下げてお礼を言う千姫の姿に弥澄は、驚いたように目を丸くしてから、照れたように視線を逸らした。

「……別にお礼を言われるような事じゃない。俺が突然声を掛けたからバランスを崩したんだからな」

そっぽを向いて、千姫と目を合わせようとしない弥澄の横顔は朱

に染まっていた。しかし、鈍感過ぎる少女は気付く事なく……。

「そう言えば、弥澄さんは何か用だったんですか？」

「あ、ああ。そろそろ夕食の時間だからな。呼びに来たんだ」

「そうだったんですか。それは、ありがとうございます」

千姫が再びお礼を言えば、ようやく弥澄は千姫に視線を戻した。

「それじゃあ、行くか。早く食べないと無くなるからな」

「そうですね」

「ほら」

「なんですか？」

突然、弥澄が差しのべた手を千姫は不思議そうに見た。

「本。持ってやるよ。結構あるし、重いだろ」

「え！ い、いいですよ！ 大丈夫です。全然重くないですから」

「いいから」

千姫が勢い良く、首を横に振ったのに弥澄は、ちょっと強引に千姫の手から本をとった。それに千姫は複雑そうな顔をしてから、少しだけ頬を緩めた。

「ありがとうございます」

「別に。気にするな」

ぶっきらぼうに返す弥澄に対して、千姫は優しく微笑んだ。そして、そのまま楽しそうに話しながら歩きだした。

朝食を食べた部屋——大広間に向かう途中で、千姫達は徠牙とバツタリと会った。

徠牙は弥澄の姿を認めた直後、パァッと明るい花のような笑顔で弥澄に飛び付いた。

「弥澄様！ 偶然ですね！ これから、大広間ですか？」
「そうだ」

弥澄が頷けば、徠牙は更に嬉しそうに笑った。しかし、不意に視線が千姫に向けられた。

徠牙はいま千姫に気付いたらしく、千姫の姿を見るなり、先程までの可愛らしい笑顔から、急激に冷めた、それでいて敵意を含む表情に変わる。

第一印象のせいか、未だに徠牙は千姫に対して、冷たい。
千姫も千姫で、一番最初の時に徠牙に刀を向けられたからか、あまり徠牙を怒らせないようにしていた。でも、だからって……。これから、しばらくは一緒なんだから、もう少し仲良くしたいな。とか、思ったり……。

「弥澄様、何でこんな奴と一緒に何ですか？」
「こ、こんな奴って……！ ちょっと失礼でしょ？」
「ああ、千姫が書庫に籠ってたから、夕食の時間だと知らせに言ったからな」
「そうなんですか。そんなのわざわざ弥澄様のお手をわずらわせる事ないのに……」
「ちょ、ちょっと無視しないでよ」

慌てた様子で千姫がそう言えば、弥澄はしまったとでも言うようなバツの悪そうな顔をした。対して、徠牙は悪びれる様子なく、そっぽを向いていた。

弥澄さんとはかく、徠牙は確信犯だ。間違いなく。
そんな風に千姫達が会話をしていた時、不意にひそひそと話し声

が聞こえた。

「おい、木暮將軍だ」

「ああ、鶴月軍師もいるぞ。……本当に妙な髪の色だ」

「あんな得体のしれないのが幹部なんて、絶対に裏切られるぞ」

そんな声が聞こえて、千姫は明らかに不機嫌と分かる程、顔をしかめて、話し声の方向を見た。

そこには、三人の兵士が弥澄達を見ながら、話していた。千姫は不快そうに兵士達を見てから、弥澄達に視線を移した。

そこで、気付いた。弥澄達の悲しそうな表情に……。

悲しそうで、それでいて、諦めきっている顔。何を言っても無駄だと、分かっているから。だから、ただひたすら何も言わずに耐えていればいい。

弥澄達の表情に呆然としていた千姫は、キュツと唇を強く噛み、意志の強い紫色の瞳で兵士達を睨み付ける。かと思ったら、千姫はいきなり、兵士達に歩み寄って、兵士達が千姫の突然の行動に訳が分からずに千姫を見つめ返そうとした時――。

バシンツと、大きな音と共に兵士の一人がよろけた。千姫が平手打ちをしたのだ。

千姫の突然の行動に弥澄と徠牙は呆氣にとられたように事の成り行きを見ていた。呆然としていた兵士達も我にかえったように千姫を睨み付ける。叩いた張本人の千姫は、俯いていて、表情は見えない。

「この野郎、何しやがる！」

「女だからって容赦しないぞ！」

「……ないで」

『は?』

小さく聞こえた言葉に兵士達が声を揃えて聞き返す。それに千姫は勢いよく顔を上げて、睨み付けてくる兵士達を真っ向から睨み返して、声を露にして叫ぶ。

「弥澄さんと徠牙の事を悪く言わないで！」

その余りの迫力に一瞬だけ、兵士達が押し黙る。が、すぐに千姫を睨みつける。

「うるせえ！ 怪しい奴を怪しいって言って何が悪いんだ！」

「そうだ！ それにお前だって充分怪しいんだぞ！」

「お前だって、乞壬の間者なんじゃないのか！」

「言っておくけど、私は何も知らないし、乞壬の間者じゃない！ それに私が怪しければいくらだって疑えばいい！ でもね、弥澄さんと徠牙を疑って悪く言うのだけは許さない！」

強面の兵士達三人を相手にしても全く怯まずに、むしろ兵士達が怯むほどの勢いで千姫は毅然と言い放つ。それは、千姫の正義感が強いから、弥澄達を悪く言われるのが嫌だったからなのか、それとも何か別の理由があったからなのか。

とにかく、千姫は兵士達三人を相手に正面と立ち向かったのだった。兵士達に反論を与える隙を見せずに千姫はそのまま続ける。

「大体ね、あなた達が弥澄さん達を嫌ってるのは、ただ髪と瞳の色が灰色や銀色だからなんですよ」

「当然だ！ あんなの見た事ない！ 不吉すぎるだろ」

その兵士の言葉に呆気にとられていた弥澄の表情が悲しみを帯びた。

「はっ、くだらないわね！ 大の大人がそんな事で嫌うなんてね。それにね、別に灰色だって銀色だって良いじゃない。弥澄さんは弥澄さん。徠牙は徠牙なんだから。容姿なんか関係ない！」

堂々と言い放つ千姫の言葉に暗い顔をしていた弥澄と徠牙の表情は、少しでも光を灯した。この千姫の言葉に二人がどれ程救われたかは、千姫はきっと知らないだろう。

「……っ。この野郎、生意気ばかり言いやがって！」

ヒュッと、一人の兵士の手が持ち上げられた。その拳は真っ直ぐ千姫目掛けて、降り下ろされるが千姫は避けようとせず、ただ毅然と兵士を睨んでいた。

それを見た弥澄が慌てたように間に入ろうとするが、距離があるため間に合わない。

兵士の拳が千姫に当たる寸前、急に千姫は後ろにいた誰かに抱き締められて、兵士の拳は千姫を抱き締めた腕とは反対の腕で止められていた。

「……本当に千姫は目を離すとすぐこれだ。危なっかしくて見てられないよ」

「迅っ!？」

聞きなれている呆れた口調に千姫は驚いたように抱き締めた人物の名を呼んだ。振り向けば、そこにはやはり迅がいて、気だるそうに緩んだ薄茶の瞳で千姫を見ていた。

「……で、助けてあげたのにお礼の一つもないの？」

「あ、ありがとう。助かった」

少しだけ不服そうだが、それもそうかと思い、素直にお礼を言った。なのに迅は自分でお礼を言えと言ったのに、視線を千姫から外して聞いていなかった。それに千姫はムツとしたように迅を見れば、そんな視線も気にせずに迅は、兵士達を睨んでいた。

「……別にあんた達に疑われようが構わないよ。どうせ、今みたいに影でしか言えないし。どうせなら、王子様本人に言えば？ この人怪しいって、ほら、ちょうどいるし。ねえ、王子様」

「そうだね。ぜひ聞かせてもらいたいね」

『く、玖零さん（王子）！』

突然、兵士達の後ろから現れた玖零に千姫と兵士達の声が重なった。

「で、聞かせてくれるかな？ 俺に何が言いたいのか？」

「め、めめめ、滅相ありません！」

「別に遠慮しないでいいよ。さ、聞かせてくれる？」

逃げようと後ずさる兵士達を逃がしはしなくても言うように、顔は笑顔のままの玖零だけど、その笑顔はどこか張り付けたお面のようだった。

「……玖零。そこまでにしてください」

『那賀櫛將軍！』

兵士達は突然の都架也の出現に助かったとでも言うように顔を緩めた。だが、兵士達は分かっていない。

都架也があまりにも優しく微笑んでいるから気付いていない。笑顔の都架也の後ろでは、静かに怒りの炎が燃えていた事に……。

当然それに玖零は気付いて、あーあ、とでも言うように兵士達を

見た。

「で、君達は髪の色が変だから弥澄殿達を怪しいと言っているんですよね。でしたら、僕も同じじゃないですか」

ニツコリと背筋が凍るような笑顔で、自分のオレンジ色の髪を一束掴んで、ほら、と兵士達に見せた。

「……………」

いい加減兵士達も都架也の怒りが伝わったのか、兵士達は恐怖したように黙り込む。

「おい、お前ら。俺の友人を侮辱した罪は重いぞ。只では、済むと思うなよ」

「待て」

玖零の言葉に顔面蒼白の兵士達の表情が引きつった時、静止の言葉が聞こえた。皆が声の主に視線を向ければ、不機嫌そうに紅の瞳で兵士達を見ていた悠緋がいた。

「そいつらは、俺の三番隊の兵だ。処分は俺に任せてもらおう」

「……まあ、それもそうだね。じゃあ、こいつらの処分は任すよ」

「ああ。……弥澄に徠牙。俺の兵が無礼をかけた。本当に申し訳ない」

くるりと方向転換して、弥澄と徠牙に視線を移して、頭を下げた。

「悠緋が謝らなくてもいいよ。僕なら全然平気だし。気にしてもないよ」

「あ、ああ。頭をあげてくれ。逆に俺がお礼を言う立場だし。ありがたいな。悠緋も玖零も都架也も迅も」

ゆっくりと辺りを見渡しながら、弥澄の視線はやがて千姫に移った。

「千姫もありがとな。なんか俺、女に庇われるなんて格好悪いな」

照れたように視線を下に向ける弥澄に千姫は、慌てて首と手を横に振る。

「そ、そんなことないですよ！ それに私こそ勝手な事をして、すみませんでした」

「全くだよ。誰も頼んでないって言うのに勝手に動いてさ」

謝った途端、弥澄とは別の方向から声がして、その言葉に千姫は、うっと声を詰まらせた。視線を動かせば、そこには呆れた表情をした徠牙がいた。徠牙の言葉に千姫は項垂れる。

「まあ、でも、助かった。一応お礼言っとく。……ありがとう」
「え？」

予想もしていなかった徠牙の言葉に千姫は項垂れていた頭を上げて、不思議そうに徠牙を見つめた。

いま徠牙がお礼を言った？ 誰に？ 私に？

その余りに呆けた千姫の顔に徠牙が心外そうに眉をしかめた。

「なにその顔。僕がお礼を言ったのがそんなに不思議？」

「と、ととと、とんでもない！ ただ、私徠牙に嫌われてると思ってたから……」

「うん、嫌いだよ」

千姫の言葉に即答で返す徠牙に千姫は驚いたようにショックを受けて、沈む。

「あんたみたいに上辺しか見ない奴なんて、大っ嫌いだよ」

どこか悪戯っぽい笑顔でそう言う徠牙に弥澄達の口元が緩められた。だが、そんな様子に鈍感過ぎる千姫は気付かないで、徠牙の言葉に落ち込んでいた。それを見た弥澄は千姫に耳打ちをする。

最初は不思議そうにしていた千姫だけど、弥澄の言葉を聞いて、一気に表情が明るくなった。

“ あれは、徠牙の照れ隠しだ ”

ボソツと言われた弥澄の言葉は千姫を笑顔にさせるのに充分過ぎた言葉だった。

「……ところで、千姫さん。書庫に籠って大分経ちましたが、どうですか？ 少しは分かりましたか」

「あ、まだ全部は読んでないんですけど、とりあえずめばしいものは持ってきました」

そう言って、千姫は弥澄が持ってくれていた本をお礼を言ってから受け取り、都架也に見せた。都架也は千姫から十冊程の本を受け取り、本を見つめた。その隣では玖零が本を見つめて、にやりと笑みを浮かべた。

「さすがだね。姫君。良いところに目をつけるね」

「そうですね。でも、まあ、こんなに読む必要は有りません。……えーと、これとこれと、あとこれも、こっちも良いですね」

都架也は考え込むようにしてから、数冊の本を千姫に手渡す。千姫の手に渡されたのは、三冊の本だった。視線を動かして、本のタイトルを読む。

【華箠の国の歴史】、【乞壬の国の敵対感情】、【星華国の非道な行い】と真新しい本から、古い本があった。

せいかこく 星華国。なんか、よく分からないけど気になったから取ってみただけど、良かったんだ。タイトルを見て、そんな事を思う。

三冊の本を見つめていれば、都架也が穏やかな声で話しかけてきた。

「今日中にそれを全て読みきって下さい。明日テストをしますのでそれに合格したら、外出を許可します」

「そうですか。明日テスト……。この本を今日中に読むのか……。……って、え？」

穏やかな声と笑顔で、あっさりと言われた言葉に頷きかけて、千姫は固まった。大きな紫色の瞳で、都架也を見つめる。だけど、都架也はにこにここと笑ったまま。

「……あ、あの、私の気のせいかも知れないからもう一度聞きますが、今何て言いました？ ……私には、今日中にこの分厚い本三冊読めって聞こえたんですけど、まさか、そんなことはないですよ？ あは、あははは」

どこか乾いた笑い声で笑う千姫にその場にいた都架也以外の全員は千姫に対して同情を覚えただろう。

「ええ、言いましたよ。今日中にその本を全て読んでくださいと」

「ですよね、やっぱり私の聞き間違い……」
「本当です」

ずばっと、言葉の途中で都架也に切られてしまう。それに千姫は笑顔のまま固まり、そして、ギギギッとぎこちない動きで周りに助けを求めた。真っ先に視線が合ったのは弥澄だった。

弥澄はどんまいとでも言うように同情の視線を向けた。迅に視線を向ければ、ため息を一つ。それから、視線を逸らされた。

皆の冷たすぎる反応に千姫は固まった笑顔から、一気に泣き出しそうな表情で都架也を見つめ直した。

「外に出たいんですね。勿論、これくらいは出来ますよね」

無理、と言わせない黒いオーラを背後に漂わせて、どす黒い笑顔を浮かべる都架也に千姫は諦めたように断念したのだった。

それから、千姫は皆が遅いから迎えに来た白桜と奏に慰められながら、迅と共に一足先に大広間へ向かったのだった。そして、廊下に残されたのは華籠の国の幹部と呼ばれる人達。玖零、弥澄、徠牙、都架也、悠緋の五人だった。

「さすがにあの分厚い本を三冊も今日中に読むのは不可能じゃないの？」

「そうですね」

「おいおい、可哀想だろう」

玖零の言葉にあっさりと言いきる都架也に対して、弥澄が呆れたように言った。

「じゃあ、なんであんな無理難題を言ったんだ？」

「……あいつを早く外に出すためでしょ？」

「ふふ、さすが徠牙ですね。僕の考えがよく分かっていますね」

悠緋の言葉に答えた徠牙に対して、都架也は満足そうに笑う。

「まだ千姫さん達の疑いは完全に晴れていません。この一週間は、外部と連絡を取る行動は有りませんでした。でも、外に出たらしめかしたら……」

「乞王の国の奴等に接触する可能性があるって、事だな」

都架也の言葉の続きを悠緋が続ければ、都架也は悠緋に視線を移して、頷いた。

「でも、この一週間見ていたけど、あいつらはとてもじゃないけど、間者には思えないぞ」

「それは僕も弥澄様に同感です。あいつら隙がありすぎます。とてもじゃないけど、間者のような事は出来ないと思います」

「僕もそう思っています。だけど、それだけじゃ確証はないんですよ。もし、本当に間者だとしたら、この国が危なくなります。それだけは、何とかして防がなければいけません」

「まあ、それもそうだね。姫君の疑いを晴らす為にもそういう手段も必要だしね」

玖零は笑うが、その瞳はどこか冷たい。あの一週間前に千姫に刀を突きつけた時の氷のように冷たく鋭い瞳をしていた。

千姫達が来てから、まだ一週間。疑いは晴れたように見えても幹部達はまだ安心していない。千姫達は間者かもしれないと疑っていた。

「けど、なんでそれだったら迅にはやらないんだ？」

「ああ、迅殿にはそんな事を言っても興味ないって言われると分か

っていたからですよ」

悠緋の言葉にニコツと笑う都架也。確かに迅なら、外に出れると言ったとしても――。

「別にいいよ、めんどいし、興味ない」

そう言われてお終いだらう。

「でも、迅殿は千姫さんが外に出るとしたら、必ずついてきます」

「ふふ、そうだろうね。ああ見えて、姫君の事大事にしてるからね」

「だから、もし迅殿か千姫さんが外部との連絡をとる気なら、外に出る絶好の機会を逃す筈がないですよ」

「お前って本当に……。敵に回すと怖いよな。味方で良かったよ」

玖零が軽口を言いながら、都架也の肩を叩く。

「でも、あの二人が間者じゃなかったらどうするんだ？」

「それはそれで、良かったじゃないですか。疑いは晴れるんですから。それにあの知識は知っていて損はないですから。まあ、僕達に不利にもなりません」

「じゃあ、逆にあの二人が間者だったら？」

徠牙の言葉に都架也の視線が鋭くなる。いや、都架也だけじゃなく、その場にいた全員の瞳が鋭くなった。

「……その時は斬れ。容赦なくね」

玖零の感情を感じさせない無機質な声に皆は頷いた。

時は変わって、夜も大分更けた頃。

千姫は自室で一人本と睨み合っていた。都架也の鬼としか思えない程の分厚い本を今日中に読むという難題を押し付けられて、千姫は夕飯を食べ終わるなり、部屋で本を読みふけていた。

元々、読書が好きな千姫が驚異のスピードで読んだ努力の結果、なんとか、二冊読み終わり、今は三冊目に突入している。

まず始めに読んだのは、【華籠の国の歴史】のという本。

真新しいその本によると、華籠の国ができたのは今から約十二年前だと言うこと。

昔は星華国という百年続いていた平和な大きな国だったのだが、星華国最後の王に君臨していた【棋風埜絃】きふうやいとが狂いだしてから、国全体が狂いだして、今までの平和が嘘のように毎日強盗、殺人が相次いだ。

そして、その諸悪の根源である王を倒すべく立ち上がったのは、星華国の東側に位置する街——通称、東軍のリーダーである、現華籠の国の王である笠野玖廉^{かさのくれん}。

そして、西側に位置する街——通称、西軍のリーダーである、現乞壬の国の王である鳶滋誠心^{とびしげせいしん}だった。

二人の力は強力であったため、その活躍により、棋風埜絃は倒されて、星華国は滅んだ。そして、東軍と西軍に別れて新たな国が創られた。

東軍——笠野玖廉が王となり、華籠の国と名付けられる。西軍——鳶滋誠心が王となり、乞壬の国と名付けられる。

両国は和平を用いて、平和に過ごしていたが、近年、乞壬の国へ行った使者が行方不明になるなど乞壬の国が明らかに敵対感情を見せている。

そのため、近い内に戦争になる可能性があるかもしれない……。

そんな風に本は終わっていて、本の大まかな内容は理解できた。つまり、元々は一つの国だったのが、二つに別れて、和平があったのに乞壬の国が敵対感情を見せて、戦争になりそうだって事なんだよね？

真新しい本だけあって、内容は新しいようだった。

次に読んだのは【乞壬の国の敵対感情】と言う本だった。

この本は、先程読んだ華籠の国の歴史の本に少し書かれていた乞壬の国へ行った使者の事が詳しく書かれていた。それに書かれていた事に千姫は少なからず恐怖を覚えた。

使者を行き来させていたのは、華籠の国と乞壬の国に別れてから始まっていたので今から十二年前。お互い平和に過ごしていたのにそれが崩れだしたのは今から三年前の事。乞壬の国へ向かった使者が帰ってこなかった。

乞壬の国に聞けば、そんなのは来ていないと言われ、不信に思うも、もしかしたら行く途中に賊に襲われた可能性もある。だから、完全に疑う事は出来ずに再び使者を出した。

何回も何回も使者をだしては帰ってこなかった。行方すら分からなくなっていた。しかし、乞壬の国に聞けば、やはり来ていないと言われる。

そして、乞壬の国からは華籠の国に向かわせた使者が来ないと言われるが、そんなのは来ていない。そんな事が続き、両国の和平に亀裂が入り始めた時、決定的な事が起こった。乞壬の国へ使者で一人だけ生きて帰ってきたものがいた。

鶴月徠牙。当時、九歳だった少年だ。九歳とは思えない程の頭の良さに大人顔負けの刀の腕前に華籠の国の軍師として働いていた少年。

その少年が六人の使者と共に乞壬の国へ向かったのだが、帰ってきたのは徠牙一人だった。全身傷だらけで、今にも倒れそうな状態で帰ってきた徠牙の体は真っ赤に染まっており、助かったのが奇跡という程だった。

徠牙は二週間程、意識不明で生死の境をさまよっていた程の重体だった。意識を取り戻した徠牙の話によれば、乞壬の国の王の城で突然囲まれて襲われたという話だ。それは、明らかな乞壬の国の敵対感情。此を機に使者を送る事は無くなり、未だに冷戦状態が続いている。

そんな内容に千姫は知った名前を見つけ、恐怖を覚えた。

——徠牙。知り合いが昔、そんな目にあって死にかけたという事実が怖かったのだ。この世界は、人間の命なんてあっさり消えていくという事が怖かった。

現に一週間前にこの世界に來た時に千姫は殺されかかった。あの人達の瞳には一片の迷いもなかった。もし、自分達に害をなす存在だと分かれば、慈悲もなくその刀で千姫を斬り伏せていただろう。

この世界ではそれが当たり前だから。大切なものを護るためなら、他人の命なんか容赦なく奪う。

それが怖かったのか、それとも何か別の感情が働いていたのか、千姫の震えはしばらく止まらなかった。

そして、しばらくして震えが止まり、また本を読み出したのだった。

最後の一冊、【星華国の非道な行い】という本。それは、タイトル通り、狂っていると言われた星華国の人道に反した行いを書いていた。

人道に反した行い。——それは、人体実験の事だった。戦争の時のために使われる軍事兵器。それを造るために多くの子供が人体実験の被害にあった。

その数、およそ三千人。実験内容は、星華国が滅ぼされたのと同じ時に永久に闇に葬りさったので、何も分からない。だが、実験はとても悲惨で残酷で、多くの子供は失敗して亡くなったと言われている。

一体何が行われていたのかは、分からないが、実験に成功した者

は特殊な力を使えるようになっていた事だけが分かっている。だが、成功した者はほんの僅かしかいなかったらしいが、今やその所在は分からない。

星華国が滅んだのと共に滅んだのか、真実を知る者は誰もいない。生きている可能性は皆無と言われているので、あの非道な人体実験は三千人という莫大な被害を残して、星華国と共に滅んだのだった。星華国の犯した罪は決して許される事はないだろう。未来ある子供達三千人の命を奪ったのだから……。

そこで、本は終わっていた。ぞくりと、背筋に寒気が走って、でもそんなのは気のせいだと、ふるふると首を振る。

……怖いというより、悲しいという感情が強かった。なんだからの凄く悲しくて、心にぽっかり穴が空いた感じだった。

パタンと本を閉じて、ベッドに勢いよく寝っ転がる。あんな分厚い本を三冊も読んだからか、目が痛い。目の疲れをとろうと目を瞑っても先程読んだ本の内容が頭の中でぐるぐると回っている。

気分が凄く重くて……。でも、こんな事じゃ落ち込んでられない。気を強く持たなきゃ。

自分に気合いを入れて、再び目を開ける。そして、視界に入ってきたのは携帯だった。電源が切れてる携帯電話。

それに手を伸ばし、携帯を手に取り、開く。真っ黒な画面は何も映し出さない。

この世界に來た日に、思い出したように携帯を見れば、既にこうなっていた。せめて、電話ができたらお母さん達に心配しないでって言えたのにな……。心配……してるよね。大丈夫かな？ 無理してないといいけど。

お母さん、お父さん、賢兄の顔が思い浮かんでは消えていく。

このまま帰る方法が見付からなかったら、もう会えないのかな？ 前なら、当たり前の日常だったのに、今では凄く遠い。ここの人達はいいい人ばかりだから、皆という時は本当に楽しいけど、一人に

なると不意に寂しさが沸き上がってくる。暗い気持ちのし掛かってしまう。

駄目だな、さっき気を強く持たなきゃって思ったのに……。なんか、今日は駄目かも……。

なぜだか、今日はネガティブな気持ちが抜けなくて、千姫の瞳には涙が浮かぶ。

その時、コンコンと扉がノックされた。それに慌てて千姫は涙を拭い、ベッドに座り直し、普段通りの笑顔を浮かべた。

「はい。どなたですか？」

千姫が訊ねれば、扉が開かれた。入ってきた人物は迅だった。

「迅！？ どうしたの、こんな時間に」

「……………」

迅は何も言わずに千姫の顔を見つめる。それに千姫が不思議そうに首を傾げていれば、迅の指がスツと頬を触った。

「目が赤いんだよ、下手くそな演技なんかまるわかりだ、馬鹿」

いつも通りのだるそうな口調だけど、どこか優しげな雰囲気。迅に千姫の表情が消えた。千姫は暗い表情のまま、俯いてしまう。

「どうせ、千姫の事だから家族が恋しいんだろ？ 家族大好きっ子だもん。心配すんな、必ず帰れるさ。俺が必ず帰してやるよ。だから……」

そこで、迅の言葉が切れて、俯いていた千姫が不思議そうにゆっくり顔をあげる。そこにいたのは、幼なじみの千姫でさえ、あまり

見たことのない優しい笑顔の迅だった。

「泣きたい時は俺に頼れよ。賢兄みたいにはなれないけど、千姫が無事に元の世界に帰れるまでは俺が千姫の家族になってやるよ。側にいてやる。……めんどくさいけどね」

だるそうな口調はいつも通り、けれど優しい雰囲気は千姫の張り詰めた糸を切るには充分だった。

千姫は、瞳に涙を浮かべて迅に抱きついた。迅はやれやれと言った様子で呆れた表情を浮かべながらも、どこか優しい表情でしばらく泣き止む気配のない千姫の頭を優しく撫で続けた。

しばらくして千姫がようやく落ち着きを取り戻してきた時、今更ながらに恥ずかしくなり千姫は頬を朱に染めて、気恥ずかしそうに迅から離れた。

「……ごめん、ね。……それと、ありがとう」

「気にしてない、何時もの事だし」

「なによ、それ？」

少しだけ頬を膨らませる千姫に対して、迅は微かに笑った。

「そう言えば、迅。何か用事があったんじゃないの？」

「……別に。ただそろそろ千姫が限界かなと思って来てみたんだけど、予想通り」

「うー」

迅に行動を読まれていて、悔しそうに唸る千姫。迅は迅で、千姫のそんな様子を見ても涼しい顔。

「……そう言えば、課題は終わったの？」

「へ？ あ、ああ。うん」

「へえ、千姫にしては頑張ったんじゃない？ で、どんな内容だった？」

少しだけ意地悪な笑顔で微笑む迅に千姫は不満そうだが、三冊の本の内容を話し出した。迅はなんだか妙に真剣な表情で千姫の話を聞いていた。

「そんな感じなんだけど……。って、迅聞してる？」

「え、ああ、うん」

返事はするもののどこか上の空の迅に千姫は不思議そうに首を傾げた。

「どうしたの？ なんか上の空だよ」

「……あー、うん。別に。じゃ、俺帰る。おやすみ」

「え？ ちょっ、迅！？」

止める間もなく、迅はそのまま部屋を出て行ってしまった。一人残された千姫は訳が分からず、迅が出ていった扉を見つめていた。

翌日、外に出るためのテストを受けた千姫は祈るように都架也の言葉を待っていた。都架也は考え込むようにしてから、穏やかに笑った。

「……そうですね、これくらい分かっていたら充分でしょう。ねえ、玖零」

「そうだね。お疲れ、姫君。よく頑張ったね」

「おめでとうございます。千姫様」

玖零も奏もにこやかな笑顔を浮かべる。千姫はその事に笑顔になり奏と玖零、そして側にいた弥澄とハイタッチをした。

玖零と奏は手を出しただけで分かってくれたけど、弥澄は不思議そうにして、手を出さなかったので、千姫が手を出してって合図して、弥澄が手を出した所で手を叩いた。

「今のは何だったんだ？」

「えーと、嬉しい時にやるものです」

「なるほど、良い事を知ったな」

にぱっと笑う弥澄の表情はどこか可愛い。

「では、早速午後から出掛けてみますか？」

「いいんですか？ 行きたいです！」

「かしこまりました。では、準備をしておきますね」

奏はそう言って、一礼をしてから、部屋を出ていった。千姫は外に出れる喜びで弥澄と楽しげに話していた時に迅と白桜、徠牙が部屋に入ってきた。

なんだか、珍しい組み合わせかも。

そんな事を思いながらも上機嫌な千姫は迅速に外に出れる事を話したのだった。

「良かったじゃない。おめでとう、千姫。今日は私は用事があるか

ら行けないけど楽しんで来てね」

「ええー、白桜は来れないんだ。残念。徠牙は？」

「僕は行くよ。あんたを放っておくと弥澄様に迷惑がかかるからね」

何か引っ掛かる言い方だが、千姫は気にせずに、迅を振り返った。

「迅は当然行くでしょ」

「俺はパス。めんどいし、興味ない」

「え？　なんで？　折角この世界を見て回れるんだよ」

そう言っても迅はだるそうな瞳で千姫を見つめて、ため息を一つ。

「興味ない。集団行動は嫌だし、千姫だけ楽しんできなよ」

いささか不満そうな千姫だが、迅がこうなったら何を言っても無駄なのを知っているから不承不承で頷いた。

場所は変わり、一週間程前に初めて城に入ってきた大きな入り口の前で千姫達は出掛ける準備をしていた。千姫の服装は普段着ていた制服ではなくて、弥澄達が着ている肩に切り込みが入っている白いセーラー服だった。

華籠の国の隊服であるこのセーラー服は、奏が用意してくれたものだ。

千姫の服だと目立つからと言うことだが、セーラー服と言う点では一緒だからあまり変わらないような気がするが、折角の好意を無下にするわけにもいかず、ありがたく頂いたのだった。

白いセーラー服は弥澄達とは少しだけ違う。弥澄達のは、腰の所で水色の二本の紐でリボン結びをしているのだが、千姫のは水色の

布でリボン結びだった。

そして、弥澄達は男と言うことで勿論白いズボンだが、千姫はスカートだった。

この国では、女の子がなかなか産まれないから、女子の人数が少なく、また軍に所属している女は白桜一人らしく、この服はこの国に二つしかないらしい。そんな貴重なものを買っていいのかな？
そう思うが、向こうの好意に甘える事にした。

「やっぱり姫君は可愛いね。よく隊服が似合ってるよ。俺も用事があるから行けないけど、楽しんでおいで」

パチンとウインクをする玖零。ウインクがこんなに格好いいのは、やはりこの外見だからなんだろう。そうして、玖零達に見送られながら、千姫と弥澄と徠牙と奏の四人で街へと繰り出したのだった。
久しぶりの外の空気に千姫は大きく伸びた。お日様の光が心地よい。

「んー、いい天気」

「はは、そうですね。千姫様はずっと城に籠ってましたから外は気持ちいいでしょう」

「その分、城で煩かったけどね」

「そうだな。千姫と迅が来てから、城が一層賑やかになったな。でも、楽しいから良いだろ」

そんな他愛ない会話をしながら、歩く。少し歩けば、賑やかな街が見えてくる。

千姫は遠くからでも分かる程賑やかで活気に満ちた大きな街を見て、瞳を輝かせた。

街に着くなり、千姫は瞳を輝かせながら辺りを見渡した。楽しそうに行き交う人々の表情に千姫の心も弾んでいく。

子供みたいに無邪気に駆け出した千姫を見て、徠牙は呆れた表情で、弥澄は嬉しそうな表情で、奏はにこにこ微笑む、と様々な反応返した。それに周りに浮かれて千姫は気付かない。ただ楽しそうに辺りを見渡して、不意に振り返った。

「今日お祭りでもあるんですか？」

「祭り？ そんなのないよ。この街はいつもこんな感じだよ」

「この街は、華籠の王が住んでいる城がある街だぞ。賑やかに決まってるだろ」

「そうですよ。ここは王様のお膝元なんですから」

「なるほど、城下町って事ですね」

千姫は一人で納得して、またきよろきよろと辺りを見渡した。そんな千姫の襟首を誰かが引っ張った。

「あんまり先に行くな。見失うだろ」

そんな声に後ろを振り返れば、そこには困ったような表情をした弥澄がいた。それに千姫は項垂れたように大人しくなる。千姫の反応に弥澄は驚いたように慌てて、それからこほん、と軽く咳払いをした。

「ま、まあ、興奮するのは分かるけどな。俺も最初この街を見た時は千姫みたいだったからな」

「ふふ、そうですね。弥澄様も千姫様と同じように瞳を輝かせていましたよね」

にこにこ笑いながら奏がそう言えば、弥澄はゲツとした表情になり、奏の言葉を止めようとするが……。

「挙げ句には余りに興奮して、私達から離れて、迷ってましたよね」
「わーわー！　そ、そんな話忘れろよ！」

「弥澄様。そんな事があつたんですか！？」

「ない！　そんな事実はない！　絶対にない」

「弥澄様、嘘は駄目ですよ」

奏に軽くたしなめられて、今度は弥澄が項垂れた。千姫はそんな様子を見て、堪えきれないように笑いだした。

こんな物凄く騒がしい四人は当然、辺りの人がちらちらと視線を向けてくる。そんな視線に気付かないのか、うるさすぎる程、賑やかに千姫達は街を見ていく。

街を見ていて、辺りにいるのは男ばかりで本当に女が居ないんだなと思う。そんな時、騒がしい声が辺りに響いた。

「止めてください！　離して」

「いいじゃねーか、姉ちゃん。ちょっと、おじさんに付き合って、酌してくれよ」

「そうそう、女なんて殆ど居ないのに姉ちゃんみたいな美人さんに会えるなんて俺達ついてるな」

そんな声を聞いて、視線を声のした方に向ける。視線に映ったのは、美しい紫苑色の髪と瞳に真っ白い肌、そして綺麗に整った顔立ちの美少女が酔っぱらっている二人の男に腕を掴まれて、絡まれている所だった。

少女は必死に抗って男達の腕から逃げようとしているが、男達の力が強いせいか逃げられない。それを見た千姫は何も考えずに突っ込んでいく。

「ちょっとおじさん達。彼女嫌がってるでしょ。止めなさいよ」

少女を掴んでいる男の腕を掴んで、少女を庇うように間に入る。
千姫の突然すぎる行動に弥澄と徠牙は呆然と奏は困ったように眉をひそめた。

「ああ？　なんだお前……って、君もなかなか美人だな。どうだい？　おじさんに酌してくれない？」

「遠慮します。昼間から呑んだくれて酔った挙げ句に女の子に絡むなんて最低な人にお酌する程、私は安い女じゃないですから」

ニコツと笑う千姫の笑顔はどこか冷たかった。だけど、その凜とした雰囲気はどこか神々しさを感じる。

「んだとこの女!？」

「おい、待て！　この女の服!」

ハツとしたように千姫の服を見つめる男達の表情はどこか青い。
それに、千姫が不思議そうに首を傾げる。

「この服は、軍の……」

「そういう事だ。王様のお膝元でこのような狼藉は困るな」

『ひいっ！　す、すいませんでしたーっ!』

弥澄の言葉を聞いて、男二人は顔面蒼白になり、そのまま凄い勢いで謝りながら走り去った。その様子を見て、千姫はくると少女を振り返る。

「大丈夫？　怪我はなかった？」

「……え？　あ、はい。ありがとうございました」

少女は一瞬、きよとした表情をするが、すぐにふわりと微笑

んだ。花のような笑顔は女の千姫でもくらりとくる。

物凄い美少女、助けちゃったよ、迅ーっ！

思わず心の中でガツポーズをしながら叫んでしまう。そんな千姫は端から見たら怪しい事この上ないだろう。少女は困ったように千姫を見つめた。

「変な所に旅立ってるね」

「おい、彼女が困ってるぞ」

「ふふ、千姫様はやはり面白い方ですね」

「へ？ あ、あはは」

弥澄達の言葉に千姫は自分の怪しい行動に気付き、恥ずかしさを隠すように笑った。

「あの、本当にありがとうございました。ちゃんとお礼をしたいんですけど、今は急いであるので失礼します」

少女はぺこりとお辞儀をして、そのまま人混みに紛れていった。その様子を千姫は呆然と見つめていた。

「可愛い女の子だったね」

「まあ、少なくともあんたよりもね」

「徠牙。そんな事を言ったら可哀想だろう。千姫は千姫で可愛いぞ。暴れ馬みたいで」

「弥澄さん、それ褒めてるんですか？」

千姫が半眼で弥澄を睨めば、弥澄は不思議そうにきょとんとした。まあ、弥澄には悪気がないのだから当然だろう。だが、弥澄の言葉に徠牙が吹き出したのを千姫は知っている。

……暴れ馬。私、そんなに暴れてるかしら？

そんな事を思いながら、未だに何も分かっていない弥澄を見たら、思わずため息が出た。

「大丈夫です。千姫様は可愛らしい御方ですよ」

にこにこと笑いながら奏は優しく千姫の肩に手を置いた。純粹すぎる言葉は心からの言葉と分かり、千姫はどう反応していいのかわからない。あ、う、と言葉に困り、顔を赤くさせて、俯いてしまう。

「どうした？ 千姫。顔が赤いぞ。熱でもあるのか？」

「何でもありません！ 気にしないで下さい」

「そうですよ、弥澄様。気にする必要ありません。ただのお世辞に喜んでるだけですから」

「徠牙っ！」

思わず徠牙の名を呼べば、徠牙は千姫を無視して弥澄と話しだす。そんな様子を奏は保護者のように、にこにこと穏やかに微笑みながら見守っていた。

千姫が不意に動かしした視線は人混みの中に見覚えのある人影を捉えた。人影を捉えた瞬間、千姫はぴたりと足を止めた。突然、動きが止まった千姫を不思議そうに三人が見つめる。

目を大きく開いて、人混みの中の一点を見つめる千姫の唇は、小さく何かを呟いた。

「……千姫？」

弥澄が不思議そうに名を呼んだ時――。

「賢兄っ！」

「千姫!？」

「千姫様!？」

「ちょ、待ちなよ!」

弥澄達の静止の声も聞かずに千姫は走り出す。

見間違いかもしれない。だけど、もしかしたら……っ!

そんな希望で人影を追いかける。

賢兄もあの場にいたんだから、こっちに來ていてもおかしくはない。まさか、まさか……っ!

大分、走った所で人影を見失う。荒くなった息を整えながら、きよろきよろと辺りを見渡す。賢らしき人物は見当たらない。

……気のせい?

希望があっただけに落胆が大きい。ハア、とため息をついて、思出す。弥澄達を置いてきたことを。

やばいっ!

そう思った時には既に遅く、辺りを見渡しても弥澄達の姿はなかった。おまけに千姫は夢中で追いかけていたため、道が分からないし、ここがどこだかも分からない。

私、どう來たっけ?

記憶を辿ろうとするが、全く思い出せず、千姫は頭を抱える。そこでやっと気付く。

なんだか、人通りが少ない事に。人はいる事はいるけれど、ガラが悪い。ここ、治安が悪い。

嫌な予感がして、千姫は足早にここを去ろうとする。だが、そんな千姫の前に見知らぬ男が立ち塞がった。それと同時に千姫を囲むように男が三人現れる。

にやにやと嫌な笑顔を浮かべて、千姫を見る。千姫は逃げ場がないことに怯みそうになるが、キッと自分を強く持ち、相手を睨み付ける。

「……何か、用ですか? 私、急いでるんですけど」

千姫がそう言っても男達にはやにやと嫌な笑みで千姫を見るだけ。その笑みに嫌悪感を覚えて、千姫は一刻も早くここから逃げようと思ひ、男達の間から逃げようとする。が、一人の男に腕を掴まれ、両腕を掴まれたまま壁に背中を押しつけられる。

「……っ」

軽く背中に痛みが走る。千姫はすぐに男達を強く睨む。

「……何するんですか。離してください」

「逃がさねえよ」

にやにやと笑いながらも千姫を押さえつける腕の力は緩めない。

千姫はその状態でも毅然として、男達を睨み付ける。

「……私が誰だか分かっているんですか？」

千姫が凜とした表情でそう言えば、男達はにやにやと笑うのを止めて、千姫を見た。

「あ？ 知ってるよ。軍の奴だろ？」

「別に俺達は軍なんか怖くない。残念だったな」

再びにやにやと笑う男達に千姫は最後の警告とでも言うように凜とした口調で言った。

「……もう一度言います。離してください」

「嫌だね」

「俺達と遊ぼうぜ」

千姫の強気な態度にも怯まずに男達にはやにやと嫌な笑みを浮かべるだけ。千姫は唇を噛み締めて俯いた。それに男達は嫌な笑みのまま。

「なんだ、泣いちゃったのか？」

「それとも怯えてるのか？」

そんな男達の声を聞いても千姫は俯いたまま。そして、口を開いた。

「……離してって、言ってるでしょ！」

勢いよく顔を上げて、男を睨み付けるのと同時に自由な足を蹴り上げて、男の鳩尾に入れる。

「がっ！」

反撃を予想していなかった男はそんな呻き声をあげて崩れ落ちた。その隙に逃げようと千姫は駆け出した。だが、すぐ近くにいた男に後ろから掴まってしまう。

「こ、の女っ！ なめやがって！」

「痛い目に合わないとかわかんねえのか！？」

男達は一斉に容赦なく千姫に殴りかかってくる。千姫はまず後ろにいる男を肘で殴ってから、腕の力を緩ませて、その一瞬の隙にしゃがみこむ。

男達の拳は当然千姫を掴まえていた男に届き、男は倒れ込んだ。その間に素早く立ち上がり、逃げようとするが、千姫が鳩尾をいれ

て倒れていた男に足を掴まれ、地面に倒れ込んだ。

「へへ、手間かけさせやがって」

「……っ！ 離してっ！」

千姫は必死に抗うが、男の力には敵わない。男の力は緩まらず、それでも千姫は抵抗する。あまりに暴れる千姫の顔を男が殴ろうとしたその時――。

「おおーっと、困ってる少女と腐ってる男達発見」

「はっはっはーっ！ そんな時は俺様の出番だぜえええええ！ 全国の皆、待ちわびたか？ 待ちわびたのか？ この俺様の登場を待ちわびたのだろう！ 俺が来たからには、お前らにそんな悪事をやらせるわけにはいかないな！ さあ、彼女を離してもらおうか！」

突然聞こえた楽しそうに弾んだ声と自信満々すぎる発言の明るい声に弾かれたように皆視線を向ける。逆光のせいで、顔が見えないが、屋根の上に二人の人影が立っているのが見えた。

「な、なんだお前ら！？」

「あんた達みたいなど等生物に名乗る名はないね」

「知りたいか？ 知りたいのか？ この全世界が平伏す程の美形の俺様の名前が知りたいのか！ ……ふふふ、良いだろう。特別に教えてやろう。俺様の名は……って、うわっ！？」

妙に自信家の男が名を名乗ろうとした直後、もう一人の男が男の背中を押した。その勢いで、自信家の男はバランスを崩して、勢いよく屋根から落ちた。

危ない！

そう思った直後、男は何事もなかったかのように軽やかに着地し

た。そして、未だに屋根にいる男を勢いよく睨んだ。

「なにすんだ、さっくん！ 危ないだろう！？ それとも、なんだ！ この俺様の魅力に僻んでいるのか？ 僻んでいるんだな？ 天さえも放って置けなかった俺の魅力に僻んでいるんだろう！」

「ううん、別に。ただ、うざかったからね。つい、ごめんごめん」

ごめんなんて、とても思っていない口調で心ない謝罪をしながら、さっくんと呼ばれた男も屋根から飛び降りて、軽やかに着地した。現れるなり、ぎゃーぎゃーと、騒ぐ二人に千姫を含め、皆呆然と二人を見ていた。

その時、さっくんと呼ばれている男が千姫に近付いてきて、千姫の上に乗っている男を蹴った。そんな力を入れてるように見えなかったのに男は、凄い勢いで吹っ飛び、壁にぶつかり、動かなくなつた。

その事態にやっと、呆然としていた男三人が突然現れた二人の男に殴りかかった。

一瞬だった。何が起こったのか全く分からなかった。気付けば、男達は地面に倒れていて、立っているのは自信家の男とさっくんと呼ばれた男の二人だった。

「危ない所だったな。大丈夫か？ まあ、偶然俺がここを通った事を感謝するんだな！ なんとって、俺に助けられたんだ！ これは誇れる事だぞ！ 自慢していいぞ！ 崇めてもいいぞ！ はっはっはーっ！」

自信家の男は、そんな事を言って、高笑いする。その時、ようやく顔が見えた。それに思わずこんなに自信家なのを納得してしまう。

薄い茶色い髪に赤と緑のオッドアイ。そして、綺麗に整った顔立ち、この世界で出会った美形集団の中で、一、二を争う程の美形だった。ただ、この自信家過ぎる性格が問題かもしれない。

そんな事を思っていたせいか、男の顔をジロジロと見すぎてしまっていた。だから、男は少し照れたように高らかに言う。

「そんなに見るなって！ まあ、超絶美形の俺様に助けられたんだ！ これはもう俺に惚れただろ？ 惚れたんだろう？ この俺のあまりの格好良さに惚れてしまったんだろう！」

「へ？ ……いや、別に」

「いいさ！ そんなに照れなくてもいいのさ！ 一瞬で女の子の心を奪ってしまう程の俺様の魅力が悪いのだからな」

千姫に口を出させる暇もなく、自己完結させて、高らかに語り出す男に千姫も呆然としてしまう。

「けどな、姫さん。これだけは言っておくぜ」

高らかに語りだしていたのにぴたりと止まり、真剣な瞳で千姫に視線を向ける。それにやっぱ顔は凄く格好良いと呆然と思う。そんな千姫の様子も気にせずに男は口を開く。

「俺に惚れたら火傷するぜ。……なーんちゃってっ！ 今の俺格好良くなかった？ いや、格好良かっただろう？ もう全世界が跪きなくなるくらい格好良かっただろう！」

高らかに笑う男を見て、千姫の心に強く刻まれた。

……ああ、この人馬鹿だ。真性の馬鹿だ、と。

不憫な瞳で男を見つめる千姫。男はそんな視線にも気付かずに高らかに笑い続ける。

「泰楓^{たいふう}くん。そこまでにしなよ。いい加減暑苦しいから」

「なんだと!?! さっくん! そんな事を言うなんて、俺に嫉妬か? 嫉妬なのか? 一瞬で女の心を奪う俺の魅力に嫉妬しているのか!」

「別にしてないよ。ただそれが暑苦しいって言ってるの」
「もう、さっくん。そんなに嫉妬するなって!」

泰楓と呼ばれた男とさっくんと呼ばれた男の会話に千姫は口を挟めず、ただ呆然と成り行きを見ていた。さっくんと呼ばれている男は泰楓の態度に呆れたように視線を動かして、その視線がようやく千姫を捉えた。

薄い茶色の髪を後ろで三つ編みしていて、先程まで飄々としていた薄茶の瞳は、今は驚いたように大きく見開かれている。整った顔立ちは泰楓と見劣りしない程、綺麗。

だけど、なんだかほんのちょっとだけ違和感がある。胸の奥で何かが反応している。

「……君の、名前……は?」

おそろおそろと言った様子で紡がれたのはそんな言葉だった。それに千姫は、きょんとしてから、気が付いたように笑顔になり、頭を下げた。

「あ! 朔原千姫です。助けてくれて本当にありがとうございます
た」

「……………」

あれ? 反応がない。
不思議に思い、顔を上げれば、薄茶の瞳がぼんやりと私を見てい

た。何か変だったのかと思い、不安気に瞳が揺れる。

千姫のそんな様子を見て、男はにっこりと大胆不敵な笑みを浮かべた。

「……どういたしました。僕は、衣笠炸斗^{きぬかさくんと}。そして、あのうるさいのが」

「壹御^{かずみだいふう} 泰楓様だ！ 覚えておくといいぞ！ なんとって、世界一の美形なんだからな！」

炸斗と名乗った青年がちらりと視線を横に移せば、泰楓と名乗った青年が自信満々にそう言った。その事に思わず苦笑していれば、視線を感じて、思わずそちらを見る。

視線を移せば、炸斗がぼんやりと千姫を見つめていた。

「……あの、何か？」

不思議そうに首を傾げて、炸斗を見つめる。それに炸斗は、ハツとした表情で、それを取り繕うようににっこりと笑う。

「ううん、別に。……ただ、昔の知り合いに似てたから驚いただけだよ。ごめんね」

そう言って笑った炸斗の表情はどこか悲しげだった。それに千姫が声を掛けようとした時――。

「あー！ いたーっ！」

聞き覚えのある声が聞こえて、振り返る。振り返れば、弥澄と徠牙、そして奏がこちらに向かって走ってくる姿が見えた。

「弥澄さん！ 徠牙！ 奏さん！」

「……こ、の大馬鹿千姫っ！」

思わず笑顔になった千姫に対して、徠牙は走ってきたスピードを落とさずにそのまま千姫に向かって、飛び蹴りをかました。その飛び蹴りは見事に千姫に決まり、千姫は地面に倒れ込む。その千姫の上にバランスを崩した徠牙の体が乗った。

「……い、たた……徠牙！ いきなり何するのよ？ 普通女の子にいきなり飛び蹴りをかます!？」

「うるさいな。勝手にいなくなったそっちが悪いんでしょ？ 大体誰が女なのかな？ 誰が」

「ちよっと、いくらなんでもその言葉は酷いわよ！」

謝る気が全くない徠牙を睨み付けて、騒がしい言い争いが始まる。突然の出来事に炸斗と泰楓は呆然とした様子で千姫達を見ていた。

言い争いをしている千姫の肩を誰かが叩き、千姫は何事かと振り返る。そこには、少し怒った表情をしている弥澄がいた。

「今回は徠牙の言う通りだ。お前は何を聞いていた？ あれだけ勝手な行動は慎めと言ったのに。本来なら飛び蹴りだけじゃ済まないぞ」

弥澄の真剣な顔と声に千姫はようやく自分のした行動が悪かったと思い、項垂れた。

「……ごめんなさい」

「まあまあ、とにかく無事だったのですから。良かったじゃないですか。千姫様も反省しているようですし、ね？」

「……はい、深く反省しております」

素直に謝罪の言葉を口にすれば、弥澄は小さくため息をついた。

「まあ、今回は大目に見るが、次はないからな」

「ありがとうございます！」

ぱあっと、千姫の顔が明るくなり、満面の笑顔でお礼を言った。

そこで、ようやく弥澄達は炸斗と泰楓の存在に気付き、首を傾げた。

「……こいつらは、誰だ？」

「あ、この人達は私がこの男達に襲われてる時に助けてくれたんです」

そう言って、地面で伸びている男達を見渡す。弥澄も男達を見て、ふむと納得したように頷いた。

「……成る程な。連れが世話になった。感謝する」

「いや、別に感謝される事じゃないよ。ただ腐った男達が嫌だっただけだからね」

ふっと不敵な笑みを浮かべて炸斗は弥澄を見た。その時、炸斗の横にいた泰楓と徠牙の視線が一瞬交じったように見えたけど、気のせいかな？

「なに御礼を言われる事じゃないさ！ なんてって俺はスーパーヒーローだからな！ 困っている人達を助けるのは当然だろ。はっはっはーっ！」

高笑いをする泰楓を見て、やっぱり気のせいかと思直した。その時、炸斗の瞳が細く鋭くなり弥澄を観察するように見る。

「……ところでさ、君が噂の木暮弥澄くん？」

「ああ？ そうだが。何故俺の名を知っている？」

突然変わった炸斗の雰囲気、弥澄は警戒するように炸斗を見た。

「だって有名だもん。物凄く強いってね」

にやりと笑った炸斗を見て、泰楓は慌てたように炸斗の前に立ち塞がった。

「待った待った！ さっくん待った！ こんな所で騒ぎを起こしてどうする？」

「それくらいは分かってるよ。でも、今は噂の木暮弥澄がどれくらい強いのか知りたい気分なんだ」

「なんだと？ そもそも、お前等は何者だ。懷に上手に隠してあるけど、刀もあるし、殺気も只者じゃない」

「……へえ。そこまで分かるんだ。結構噂って当てになるかもね」

見定めるような瞳で弥澄を見ながら、炸斗はどこに隠していたのか刀を一本取り出した。それと同時に弥澄も刀の柄に手を掛ける。お互いに睨み合い、緊迫した雰囲気になる。ぴりぴりと何か強い力を感じる。これが、殺気というものなのだろうか。

激しい殺気の飛ばし合いに千姫は、力が抜けて、地面にへたりこんだ。

「なんだか、物凄く怖い。」

お互いに一步も譲らずに睨み合い、炸斗が刀に手を掛けた直後、

「……“全員動かないでください”」

凜とした声が聞こえた途端、全員の動きがぴたりと止まった。何故動きが止まったのか自分でも分からない。ただ、体が動かなかった。

ザツと足音が聞こえて、二人の人影が現れた。どうにか動かせる視線をずらして、人影を見る。

そこにいたのは、先程街で酔っぱらいに絡まれていた紫苑色の髪
の美少女だった。少女は紫苑色の瞳で千姫達を見据えていた。

「……“動いてどうぞ”」

そんな声が聞こえた途端、体が自由に動くようになった。

「……あなたは」

一体何者？

そんな言葉は続かなかった。少女は千姫と目が合えば、にっこりと優しく微笑んだ。

「手荒な真似をしてすいません。先程は助けて頂いて本当にありがとうございました」

その顔はとても可愛くて、思わず言葉に詰まってしまう。そんな少女の横に居た漆黒の前髪に左目が隠れていて、本人の冷静さを映すように冷めている金色の瞳の男が口を開いた。

「……炸斗。何をやっている？ 俺達の仕事を忘れたのか？」

「もちろん覚えてるよ。でも強いかもしれない相手が目の前に居るんだったら戦いたくなっちゃわない？ それに烙^{らく}くん達だって遅れてたでしょ」

烙と呼ばれた男は呆れたようにため息をついて、抑揚のない声で言った。

「恢復かいふがまた女に間違われて絡まれてたんだ」

「また？ 相変わらずだね。まあ、実際に恢復くんはそこの女の子より、よっぽど可愛いからね」

「ひ、酷いです！ 炸斗さん！ 僕だって気にしているんですよ」

恢復と呼ばれた少女は炸斗に慌てたようにそう言った。

「……………え？ 今、何て言った？ 女に間違えられたとか言ってた気が…………」

千姫は、状況が理解出来ずに目を丸くして、恢復と呼ばれた少女——否、少年を見つめた。その少年は、やっぱりお人形さんのように可愛い顔をして…………

なんだか、千姫は悲しい気持ちになった。
本物の女より可愛い男って…………。それ以上は虚しくなるから考えないでおこう。

千姫は恢復と呼ばれた少年を見ながら、そんな事を考えた。その時、白刃が煌めき、それを視界の隅で捉えた千姫は勢いよく顔をあげた。

目に映ったのは、弥澄が炸斗に刀を向けている所だった。弥澄の横では、徠牙も刀の柄に手を掛けていて、いつでも抜刀できる状態で炸斗達を睨んでいた。

「…………お前達は一体何者だ？ それにそこのお前は」

弥澄の鋭い視線は恢復に移される。恢復は鋭い殺気を向けられても全く怯まずに困ったように眉をひそめた。

「…………あー、別に僕達はあなた達と争いに来た訳じゃないんですよ。」

今は」

「今はって事はいずれ争う事になるんでしょ？　だったら、怪しい芽は摘んでおかないとね」

「それは同感かもね。まあ、君は中々に聡いみたいだし、僕達が何者かなんてとづくに分かつてるんでしょ」

互いが殺気を飛ばし合い、ピリピリした雰囲気の中だというのに余裕そうに笑顔で挑発するような炸斗に対して、弥澄は今までに見た事がないほどの冷たい表情で炸斗に刀を近付けた。

「……乞壬の者だろ？」

確信を持ったその声に炸斗はさらに笑みを深めた。

乞壬の者？　この華籠の国と敵対している国の人。じゃあ、この人達は敵なの？

「大正解。僕は衣笠炸斗。こつみのおうせんぞくがーでいあん乞壬の王専属守護者。趣味は、強い者と戦う事」

再び白刃が煌めき、刀と刀がぶつかりあう音が辺りに響いた。炸斗の刀は、いつの間にか抜刀されていて、その刃は弥澄の刃とぶつかりあっていた。

突然の事に驚いたのか、それとも炸斗の動きが予想以上だったのか、弥澄は驚きの表情を隠しきれていなかった。そんな弥澄を見て、炸斗はさらに余裕そうに笑った。

「……よろしく。弥澄くん」

にやりと笑った炸斗と弥澄は同時に刀を打ち合った。そのあまりの激しさに千姫は何をするでもなく、ただ呆然とその様子を見てい

た。そんな千姫の肩を誰かが優しく叩いた。

その衝撃で我に返った千姫は、不思議そうに振り返った。そこには、優しげに微笑んでいる奏がいた。

「千姫様。ここは危険です。少し下がりましょう」

「でも……」

「皆様なら大丈夫ですよ」

そう優しく微笑まれても千姫はその場所から離れようとしなかった。

「あー、炸斗さんが暴走しちゃいましたよ。どうしますか？ 烙さん」

「仕方ない。炸斗が我々の正体を明かしたんだ。こいつらを何とかしないと帰れないからな」

烙と呼ばれた男は刀の柄に手を掛けた。それと同時に烙の前にいた徠牙が鋭い視線で烙を見て、構えた。

「……媛ひめはやしらく離烙。同じく乞壬の王専属守護者だ」

「烙さんまで！？ ……はあ。僕は、捺種なつくさかい恢复。同じく乞壬の王専属守護者です」

「そして、俺が壹御泰楓様だ！ 俺様は……っ！」

泰楓の言葉が終わらぬ内に徠牙は刀を抜いて、凄い速さで恢复に斬りかかった。それは、完璧なまでの不意打ちで避けられる筈もない。なのに恢复は慌てる様子もなく、余裕そうに刀を見つめていた。

「“僕の前には壁がある”」

一言そう言っただけで、ぴたりと徠牙の動きが止まった。いや、正確には止まっているのではなく、恢屢の周りは見えない壁で護られていて、その壁に徠牙の刀は阻まれていた。

その不可思議な出来事に徠牙、炸斗と斬り結んでいた弥澄、そして傍観していた千姫と奏も驚いたようだった。けれど、恢屢も他の人達は対して驚いた様子は無かった。

「……余所見してる暇なんかないんじゃないかな？」

「くっ！」

恢屢に気を取られていた弥澄は炸斗からの激しい剣撃に顔を歪ませた。

「……あんだ、もしかして」

徠牙は信じられないという表情をしてから、何かに気付いたかのように恢屢を睨み付けながら、恐る恐ると言った様子で口を開いた。

「……星華国の人体実験の被害者？」

確信のない徠牙の言葉に千姫と奏、そして弥澄も驚きの表情を隠せずにいた。

星華国人体実験の被害者。まだ真新しい記憶の中に残る言葉。昨日、読んだ本に書かれていた内容。

人道に反した実験。子供達、約三千人の被害が出た実験。星華国が滅びたと共に闇に葬られた実験。生存者はいないと言われていた実験の生き残り？

千姫は信じられないとでも言うように恢屢を見つめた。恢屢は困ったように眉をひそめた。

「……その言い方、あまり好きじゃないです。僕だって好きでこの力を手にした訳じゃないですし」

……力。人体実験の被害者の多くは失敗して命を落としたが、実験に成功したものは、特殊な力が使えるようになっていた。そう本に書かれていた。

嘘のような話だと思っていた。でも、それならあの不思議な現象も理解できる。

“……全員動かないでください”

そんな言葉が響いた途端、全員の動きがぴたりと止まった。動こうと思っても動けなかった。

“……僕の目の前には壁がある”

その一言で恢復の周りにある見えない壁により、徠牙の刀は防がれた。ただ一言。恢復がそう言っただけで、周りの事象が全て恢復に従った。

そんな不可思議な現象。とてもじゃないけど、信じられない。だけど、自分達だって実際に異世界に来ている。

そう考えれば、もう何でも有りなんだなと思ってしまう。そんな自分の順応能力の高さに思わず苦笑してしまう。

「……言霊使い、だね？」

徠牙の言葉に恢復はこくりと頷く。

こしだまつかい
——言霊使い。

言葉に宿る力を使い、事象を操る者。現代にいた時に読んだ漫画にそんな風を書いてあった気がする。千姫が思い出すように記憶を漁っていた、その時——。

「……おわ、ちょっとヤバイ！ ひゅうさんが怒ってるぞ」

泰楓の突然すぎる言葉に炸斗、烙、恢屢が顔を歪ませた。
ひゅうさん？ 一体誰の事だろう。

「……それは、ちょっとまずいですね」

「炸斗。退くぞ」

「仕方ないね。じゃあ、またね。弥澄くん」

「おい！ 待てっ！」

弥澄の静止も虚しく、四人は軽やかな身のこなしで屋根の上に登り、千姫達を見下ろした。

「今日の所はこれで失礼させてもらう。だが、次に会った時は容赦しない」

「はっはっはーっ！ またピンチになったら俺を呼べよ！ いつでも助けに行くぞ！ なんだって、ヒーローだからな！」

「弥澄くん。次会う時は、もうちょっと強くなってほしいな。今のままじゃ、弱いからね」

「それでは、皆さん。今日は突然すいませんでした。では、僕達はこちらで」

恢屢のそんな言葉を最後に四人の姿は忽然と消えた。突然すぎた出来事に千姫達はただ呆然と四人がいた所を見つめていた。

第三話 疑惑

「……さて、どうして迅はここに残ったのかな？」

千姫達を見送った後、玖零はくると方向転換をして、迅を振り返った。その顔は笑顔だが、どこか冷たさを備えた表情だった。

「別に。特に理由なんかないよ。ただ、面倒だったから」

「ふうん。そうなんだ。何か迅が言いたそうだったから、残ってあげたのに」

「……残ってあげた、じゃなくて、俺を見張る為に残った、の間違いじゃないの？ 王子様」

迅の言葉に玖零は何も言わない。ただ、流石だね、とでも言うように笑みを深めた。

「別に何もしないよ。ただ、知りたい事があったんだ」

「知りたい事？ それは、興味深いね。俺に教えてくれるかな？」

疑問系で聞いているのに拒否を許していない玖零の言葉に迅はめんどくさそうにため息をついた。

「……じゃあ、聞くけど。この国が乞壬の国と戦争を始めたら、王子様達も戦場に出るの？」

迅の言葉は玖零の予想とは違っていたのか、玖零は驚いたように目を丸くさせた。が、直ぐに何時もの不敵な笑みを浮かべる。

「何を言うかと思えば……。勿論、出るに決まってるよ。俺達が出ないで誰が出るのさ」

「だろうね。じゃあ、その間にここは大丈夫なの？ 安全なの？」

「安全……とは、言いきれないだろうね。もしかしたら、乞士の暗殺者とかが来るかもしれないしね」

暗殺者。その言葉に迅は顔を歪めた。そして、しばらく考え込むように俯いていたが、何かを決意したような強い瞳で玖零を見据えた。

「……あんた達がまだ俺達の事を疑ってるのは分かります。だけど、無理を承知でお願いします。俺に刀を教えてください」

深々と頭を下げた迅にまた玖零は予想外だと言うように驚いた顔をした。

「……なんで刀を持つと？ 別に安全な場所で隠れてれば良い」
「確かに。面倒な事はあまりしたくない。けど、いつ帰れるのか、それどころか、元の世界に帰れるかすら分からない。もしかしたら、このままこの世界に死ぬ迄いるかもしれない」

迅の瞳には何時もの気だるさがなく、真剣な瞳で玖零を見据えていた。

「だから、この世界にいる限りは自分の身は自分で守るくらいは出来ない……」

「じゃないと、姫君を護る事も出来ないからね」

玖零の言葉が凶星だったのか、迅は黙り込んでしまう。が、玖零の不敵な笑みを見て、覚悟を決めたように強い瞳で玖零を見つめた。

「そうだ。大事な奴を護れるだけの力がほしい。だから、俺に刀を教えてください」

「……それは、人を殺す覚悟もあるということですか？」

再び頭を下げた迅に声を掛けたのは、玖零ではなく、いつからいたのか、鋭い瞳で迅を見ている都架也だった。

驚いたように顔を上げた迅と目が合えば、都架也は穏やかに、だけど、どこか冷たい笑顔を浮かべた。

「悪いとは思いましたが、話は聞かせてもらいましたよ。……それで、迅殿は千姫さんを護るためならその手を血に染める覚悟はあるんですか？」

もう一度、真剣な瞳で都架也は真っ直ぐに迅を見据える。迅の瞳は一瞬戸惑うように揺れたが、すぐに決意したように強い瞳で都架也を見つめ返した。

「……あります」

迅がそう答えた直後、迅の体は壁に叩きつけられ、素早く首の横に刀を突き付けられた。突然すぎる行動に迅は反応出来ずに刀を突き付けた張本人——都架也を呆然と見つめた。

都架也にはいつもの穏やかな雰囲気がなく、冷たく鋭い瞳で迅を見据えていた。

「……人を殺すと言うのは、その人の未来を奪うと言うことです。色んな人に恨まれる。あなたが考えてる程、甘い事じゃないんです」

都架也の冷たく鋭い眼差しで睨まれても迅は怯まずに都架也を見

つめ返した。

「……それでも、俺は大切な奴を護る為なら、何だってやってやる。あいつの笑顔が護れるなら、人だって殺してやる。修羅にだってなつてやる。それで、地獄に堕ちたとしても、構わない」

迅の言葉に今度は、都架也が黙り込んだ。真っ直ぐに迅を見つめて、それから、ハアと小さくため息をついて、刀を鞘に閉まった。

「……分かりました。あなたの覚悟は受け取りました。教えてあげましょう。刀を」

「都架也。良いのかい？」

都架也の言葉に今まで事の成り行きを傍観していた玖零が口を開いた。都架也はそれに対して振り返り、何時もの穏やかな笑顔でにっこりと微笑んだ。

「ええ。その言葉が真実なのか。どれ程の覚悟があるのかお手並み拝見といきましょうか」

その黒い笑顔に玖零は少し恐怖を覚えながらもそれを悟られないように余裕そうに微笑んだ。

「……なあ、一つだけお願いがあるんだけど」

「お願い？ それは何ですか？」

「千姫には秘密にしといて下さい」

迅の言葉に玖零が不思議そうに首を傾げた。
何故？ そう聞いているようだった。

「俺が刀を教えて貰ってると知ったら、あいつも刀を教えろって言うに決まってる。あいつは刀なんか持つ必要なんかない。あいつの手を罪に汚す必要なんかないんだ」

「……大切な者を護るためなら、いくら自分が傷付いたって構わない、か。まるで、俺達みたいだね」

「ふふ、そうですね。そこまでに自分が汚れ役を買ってでも千姫さんの事を護ろうとするなんて……。本当に」

都架也の言葉は続かなかった。続かなかったけれど、その穏やかな微笑からは、本当に僕達に似ていますね、そう言っているようだった。

「……俺は、あいつの笑顔を護るためなら何だってやってやる。だから、宜しく願います」

「分かりました。迅殿には僕が刀を教えましょう」

「え？」

都架也の言葉に迅は意外そうに目を丸くした。その顔に都架也は失礼そうに眉を寄せた。

「何ですか、その顔は？ 僕じゃ不満なんですか？」

「いや、そうじゃなくて。都架也さんって、刀使えるんですか？」

「弥澄殿や玖零には敵いませんがね。人並みには使えますよ。それに弥澄殿や玖零に教えて貰うのも結構ですが、あの二人の流派は特別だから、僕達じゃ扱えませんよ」

「特別？」

迅の不思議そうな言葉に都架也は穏やかな微笑のまま頷いた。

「ええ。あの二人は自流の流派でして、自分達の感覚で使っている

ので、僕達には到底真似出来ません」

都架也の言葉に迅は興味なさそうに、そうなんだ、と小さく呟いた。

「じゃあ、都架也さんは何の流派？」

「残念ながら、僕達は流派と言うものは無いんですよ。完全に実戦なので、型とかは無いんですよ。……だから、教えると言ってもただ戦って感覚を鍛えるだけですわね」

都架也は穏やかに微笑みながら、そんな事を言った。あまりにも穏やかに簡単に言っただけだったので、ついそのまま流してしまいそうになるのを必死で堪えた。

戦って感覚を鍛えるだけって、相当難しいんじゃない？

そんな迅の心を読んだのか、都架也は穏やかに微笑したまま口を開いた。

「まあ、例えば型通りに教えても実戦で使えなきゃ、意味が有りませんからね。だから、僕達と戦って実際に戦闘経験を学ぶんです。……勿論出来ますよね？」

自分から刀を教わりたと言っただけで、出来ないなんて言わないですよね？ そう、穏やかな言葉の裏に隠れていた気がした。

都架也は穏やかな微笑のまま、だけど何処か黒い雰囲気で見つめれば、迅は少し動揺したように頷いた。

「……そうですか。では、早速取り掛かりましょう。そうですね。……では、まずは体力をつけなければ行けませんし、軽く八キロ程走りましょうか」

再び、穏やかに簡単に言っただけの都架也の言葉に迅は目を丸くさせて固まった。それを見た玖零が何処か同情したように、ただ何処か楽しそうに笑いながら、迅に耳打ちした。

「まあ、頑張れ。都架也はスパルタだよ」

玖零はそれだけ言うと言に背を向けて、手をひらひらと振って、そのまま歩き出してしまった。

残された迅は都架也から逃れる術は無く、疲れたようにため息をついたが、直ぐに思い直したように強い瞳で都架也を見つめた。

都架也はそれに笑みを深めて、まるで、上等、そう言っているようだった。

「じゃあ、早速行きますか」

「はい」

都架也の言葉に力強く迅が頷いた。

「王子。木暮將軍のお帰りです」

「分かった。今、行くよ」

突然、一人の兵士に話し掛けられて、玖零は読んでいた本をパタリと閉じた。そして、その本をそのまま机の上に置いて、私室を出ていった。

玖零の読んでいた本のタイトルには【戦姫物語】と書かれていた。

「お帰り、姫君。街はどうだった？ ……って、あれ？ どうしたんだい？」

「あ、玖零さん。ただいまです」

明らかに落ち込みまくっている千姫は玖零の言葉に反応して顔を上げるも出てきた言葉はそんな気の抜けた声だった。玖零はその様子を見て、弥澄と徠牙に視線を移した。

二人は玖零と目が合えば、同時に頷いた。何か言いたい事が有るようだった。それを素早く察した奏は千姫の肩に優しく手を置いた。

「さあ、千姫様。お疲れでしょう。部屋に戻りましょうか。お茶でも淹れますよ」

「わあ、本当ですか」

奏の言葉に落ち込んでいた千姫は、パアと明るい笑顔になった。奏はそんな千姫の反応を見て、優しく微笑んだ。それから、二人は玖零達に頭をぺこりと下げて、部屋に戻って行った。

それを玖零は笑顔でひらひらと手を振って、見送っていたけど、千姫達の背中が見えなくなったら、ぴたりと真剣な表情になり、弥澄達に視線を移した。

「一体何があったんだい？」

「……実は、街で千姫とはぐれて、見つかった時に二人の男といたんだ。千姫は男達に襲われている所を助けて貰ったと言っていて、周りに男達が倒れていたからそれは間違いないと思う」

「ふうん。それで？」

続きを話すように玖零が促す。弥澄を見つめる瞳は何処か冷たい。弥澄の話を聞いて、千姫を見定めるかのように視線を鋭くさせていた。

「……それで、その男の一人が刀を持っていて、殺気を放って来たから、斬り合いになりそうになった時にまた二人の男が現れたんだ」
「そいつらは乞壬の奴等だったよ。しかも、一人は星華国人体実験の被害者で成功例だったよ。言霊使い」

徠牙は弥澄の言葉を繋ぐように話を続ける。徠牙の顔は何処か不機嫌で恐らく戦った時の事でも、思い出しているんだろう。徠牙の言葉に玖零の眉がピクリと反応する。

何だって？ そう言っているようだった。

「……それは、どんな奴等だった？」

「えっと、大胆不敵だけど刀の腕は凄く強い奴と物凄く自信家の奴と冷静な奴と女の子と見紛う程可愛い奴だったな」

「弥澄様。確かに的を射てますが、そんなんじゃ伝わりませんよ。名前は衣笠炸斗、壹御泰楓、媛囃烙、捺種恢屢と名乗ってました」

「衣笠炸斗、媛囃烙、捺種恢屢の三人は乞壬の王専属守護者と名乗っていた」

弥澄の言葉に玖零が再び反応した。何か考え込むようにしてから、口を開いた。

「……乞壬の王専属守護者。聞いた事あるね。乞壬の王を護る絶対の守護者達で王に仇なす者は容赦しないと。だから、最初の方に乞壬の王を暗殺しようとしていた連中は皆殺しされたって聞く程強い連中だって話だけど」

「ああ。実際に衣笠炸斗って奴は強かった。俺も本気じゃなかった

が、あいつも全然本気じゃなかった」

「……ごめんなさい。本当は捕まえたかったけど、逃げられちゃった」

徠牙は悔しそうに俯くが、その頭を優しく弥澄が撫でた。

「まあ、そいつらが守護者なら簡単には捕まえられないだろう。気にしないでいいよ。でも、守護者がこの国に居るって事は、偵察のつもりかな。本当に戦が近そうだね」

深刻そうな言葉に弥澄と徠牙の表情も翳る。

「で、姫君があんなに落ち込んでいたのはなんで？」

「……昨日玖零達が言ってたように千姫が乞壬の間者だって分かったら、斬れて言ってただろ。で、千姫は街中で突然誰かを見つけたように走り出した。その結果行方不明。見つけた時に居た奴等は乞壬の奴等。偶然と言えば、そこまでも知れないけど、疑うには充分すぎる程の理由はある」

弥澄はそこで一旦言葉を切り、小さくため息をついた。

「……だから、俺達も確認してみようとしたら、既にああなっていたんだ」

「理由を聞こうと思って声を掛けたら、凄い勢いで謝ってきたんだよ。ごめんなさいっ！　ってさ。今にも泣きそうな顔で言われて、僕達もどうしようかと思ってたら奏が宥めて理由を聞いてくれたんだよ」

本当に困ったよ、とため息混じりで話す徠牙に弥澄も苦笑していた。それから、視線を玖零に移して口を開く。

「……私が離れたばかりに敵国の人と出会って、皆に迷惑をかけて、危険な目に合わせて本当にごめんなさいっ！　って、言ったんだ。あまりにも必死で言ってたし、やっぱり千姫は間者に思えないから」

「もし間者だったとしても、相当使えない奴だったから、追い出されたんじゃない？」

ケラケラと笑う徠牙に弥澄も苦笑しながらも、確かなな、と頷いた。

「ふうん。成る程ね。報告ありがとう。俺達の方も何も無かったよ。……いや、あったかな」

「何があったんだ？」

「迅が刀を教えてほしいって言ってきてね」

『はあ？』

玖零の言葉に弥澄と徠牙の声が綺麗に重なった。

二人共、同じように目を丸くさせていて、その様子があまりにもそっくりだったから、玖零はくすりと心の中で笑った。

「それで、今は都架也のスパルタ特訓で、八キロ走らされてるよ」

「刀を教える事にしたのか？　何故？」

「そう言うと思ったよ」

くすつと笑う玖零に対して、弥澄は不思議そうに首を傾げた。

玖零は弥澄に視線を移してから、何かを思い出すように瞳を細めた。

「……似てたんだよ。俺達に。大切な人を護る為なら、いくら罪を

重ねても構わない。そう、目が語っていた」

ふっと頬を緩ませて、笑う玖零の表情は、どこか寂しげで、今にも消え入りそうな程、儚かった。

「本当は、刀を教えるべきじゃないけどね。大切な人を護る為なら他人さえも傷付けるのだから。……本当に愚かな奴がする事だよね」

玖零の自嘲するような笑みに弥澄達は何も言えずに黙り込んだ。

「でも、自分に力がないせいで、大切な人を失う辛さは良く分かるから。もう、そんな奴は出したくないんだ。俺も都架也も……ね」

「……そう、だな」

「まあ、そんな綺麗事なんか俺が言えた義理じゃないけどね」

ふっと笑った玖零の表情は何時もの不敵な笑顔だった。そこには先程迄の儚い表情はどこにもない。

先程迄の儚い表情が幻だったかのように玖零は、何時もの不敵な笑顔で弥澄達を見つめていた。

「……玖零」

「何深刻な顔してんのさ？ そろそろ迅達も帰ってくる頃だろう？
どれだけ疲れきってるのか見に行こうか」

ははっ、と軽く笑って、玖零は弥澄達にくるりと背を向けて歩き出す。

弥澄と徠牙は困ったように顔を見合わせてから、玖零の後を着いていった。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

奏から手渡された、カップを受け取り、お礼を言った。カップの中に入っている紅茶は、とても良い香りがした。湯気が立っているということは、大分熱いのだろう。

カップ越しに伝わってくる温かさに千姫の心が安らいでいく。少し冷ましながら、少量口に含めば、紅茶の味が口の中に広がっていく。

千姫の飲んでいた紅茶とは何処か違い、とても美味しい。その事に知らずの内に頬が緩んでいく。それを見た奏は穏やかな笑顔を浮かべながら、ゆっくりと口を開いた。

「……少しは落ち着きましたか？」

「はい。お騒がせしました」

「いいえ。気にしてませんよ」

穏やかな笑顔に安堵する。千姫は安心したように微笑み、また紅茶を一口飲んだ。

「……ところで、一つ聞いてもよろしいでしょうか？」

「え？ あ、はい。どうぞ」

「先程、千姫様がはぐれる前に『賢兄』と言ってましたよね。賢兄とは、一体どなたの事なんですか？」

「……………」

奏がそう聞いた途端、明るかった千姫の表情が陰り、俯いてしまった。その様子を見た奏は慌てたように声を掛けようとした時、俯いていた千姫がポツリと呟いた。

「私の兄なんです。いつも明るくて、ふざけていて、可笑しな関西弁使ったりしてるけど、とても優しく、いつも優しい笑顔で私を助けてくれたんです」

俯いている千姫の表情は見えないが、ぽつり、ぽつりと落とす言葉は何処か寂しさを表していた。

思い出すのは、昔の事。

いつも自由に動き回っていた千姫を見守ってくれていたのは賢だった。

千姫の変化に一番鋭く、いつでも心配してくれた、ただ一人の大切な兄。

賢の事を思い出せば、幸せだった日常を思い出す。

ごく普通の日常。命の危険に晒される事のない平凡で退屈、だけど幸せな日常。学校の眠くなる授業も友達との会話も、当たり前でこれからも続いていくと思っていた日々。喧嘩したり、泣いたり、笑ったり、そんな日々が今では凄く懐かしい。

こんな風に気分が落ち込んだ時は賢兄が頭を優しく撫でてくれたな。

『ん？ どうした？ 兄ちゃんに話してみろ？』

そう優しく微笑んで。

そんな事を思い出していた千姫の頭に優しく手が置かれた。ハッと、顔を上げた千姫の視界に入ったのは、優しく穏やかな笑顔で微笑んでいる奏だった。その優しい笑顔が記憶の中の賢の笑顔と重

なった。

「……大丈夫ですよ。また会えます。元の世界に戻って、また会えますよ」

その優しい笑顔を見て、千姫の頬に涙が伝った。

それを見て、奏は慌てたように手を離そうとするが、千姫が首を横に振ったのを見て、少し思案してから、再び千姫の頭を優しく撫でた。

「……ありがとうございます」

千姫の言葉に奏は、何も言わない。ただ優しく微笑みながら、千姫の頭を優しく撫で続けた。

しばらくして、千姫が落ち着いた頃、奏は頭を撫でる手を止めて、真っ直ぐ千姫を見つめた。

「さあ、そろそろ元気を出してください。千姫様に泣き顔は似合いません。私は千姫様の笑顔が見たいのですから」

某皇子のような台詞をさらりと言う奏に千姫は、くすりと笑う。

「はい。奏さん、ありがとうございました」

そう言って笑った千姫は、何時もの笑顔だった。奏はその笑顔を見て、太陽のように温かく笑う人だと思い、そっと微笑んだ。

「……それで、一体あなた達は仕事もせずに何を遊んでいたのですか？ 詳しく聞かせて欲しいですね」

「いやー、それはその……」

「華籠の軍の奴等と戦ってましたよ」

「ちょ、さっくん！ 何を馬鹿正直に！」

「だって、本当の事でしょ？」

泰楓に凄い勢いでそう言われても、炸斗は涼しい顔で言い放った。それに泰楓は呆れたようにため息をついた。

「あ、あの、それで仕事は？」

「誰かさん達が遊んでいる間に終わりましたよ。誰かさん達が遊んでいる間にね」

「ひゅうが彪牙。悪い。俺がついていながら」

「何で謝るんですか？ 私は全く怒っていませんよ」

ふふ、と冷たい微笑を浮かべる彪牙と呼ばれた人物。

外套を目深に被っており、顔が隠されているので、顔は見えない。唯一見える口元は妖しく弧を描いていた。

「なんだ、仕事終わってるんだ。さすが彪牙くんは早いね。じゃあ、一旦国に戻ろうか」

「え？ もう戻っちゃうんですか？」

「うん。ちよっと気になる事があってね。王様と話したいんだ」

「王様と？」

不思議そうに首を傾げる恢屢に炸斗は意味ありげに微笑んだ。

「じゃあ、帰るか。泰楓」

「はあ。何でスーパーヒーローの俺様にこんな作業させんだよ！」

「違いますよ、泰楓。これは、スーパーヒーローの泰楓にしか出来ない重要な役割なんです。私達のような者にはとてもじゃないですけど真似出来ませんから」

明らかに不満そうに顔を膨らませていた泰楓は彪牙の言葉に一気に目を輝かせた。

「はっはっはーっ！　そこまで言われたら仕方ないな。まあ、確かに、お前達には無理な話だもんな！　なんたって、俺様だから出来るんだ！」

「さすが彪牙くん。泰楓くんの扱いに馴れてるね」

「ふふ、単純ですからね」

彪牙の言葉に炸斗もそうだね、と頷いた。それから、路地裏にいた五人の姿は一陣の風と共に消え去った。

「……あーっ！　暇だーよー」

「千姫。うるさい」

不服そうに顔を膨らませている千姫を迅は迷惑そうに睨んだ。しかし、千姫はそんな迅の睨みに動じる筈もなく、迅を見つめ返した。

「だって、暇なものは暇なんだもん」

きっぱりと言いきる千姫に迅はめんどくさそうにため息をついた。そう、千姫が暇だ、暇だと言っているのも当然かもしれない。

こないだ千姫達が街に出掛けたのが、今から約一週間程前の事。偶然街で出会った人達が敵対している乞壬の人間で、乞壬の人が彷徨っている以上、外は危険と言う事で、また外に出られなくなっただの。

城で大人しくしているのも別にいいのだけど、弥澄達は乞壬の国の攻撃を警戒しているので、話し相手がいなくて、暇なのだ。だから、迅と話そうと思っても迅も用事があると言って、どこかに行ってしまう。

「まあ、適当に頑張れば？」

「あ、迅！ どこ行くの？ またいつもの用事？」

「そう。ついてくるなよ」

迅は椅子から立ち上がり、千姫に背中を向けて、歩き出してしまふ。それを千姫は不満そうに見てから、突然椅子を立ち上がり、迅の背中に乗り掛かった。

「ねえ、いい加減に何の用事か教えてくれないじゃない」

「……………重い」

「なっ！ 失礼ね！ それ、女の子に言って良い台詞じゃないよ！」

「…………女の子？ 誰が？」

ハッと、嘲笑うように言った迅に千姫は背中にのし掛かった状態のまま、思いきり蹴りを入れた。突然の攻撃に迅の体はバランスを崩して、背中に乗り掛かったままの千姫と共に床に倒れた。

「……い、たた」

「……………千姫」

下から聞こえた不機嫌な声に千姫は慌てて視線を移した。そこには、明らかに不機嫌そうな迅がいて、さすがに千姫も慌てて謝った。

「ごめん！ 大丈夫？」

「おーい、千姫。ちよつと、話が……」

千姫が謝るのと、弥澄が部屋の扉を開けたのは同時だった。弥澄は部屋の光景を見るなり呆然として、それから顔を赤くさせた。顔を赤くさせた弥澄に千姫は不思議そうに首を傾げた。

「わ、悪いっ！ べ、別に邪魔する気は無かったんだ！」

「え？」

「い、いや、別に、お前と迅がそうゆう関係だったなんて、俺誰にも言わないから！ えつと、その……」

弥澄の言葉に不思議そうに首を傾げていた千姫は、自分の体勢を思い出す。未だにさっき倒れた状態のままで、迅の上に千姫が乗っかっていた。確かにこの状態じゃ、誤解されてもおかしくない。

迅はめんどくさそうにため息をついた。千姫はようやく状況に気付き、誤解を解こうと慌てて立ち上がり、弥澄に向かい合おうとすれば、弥澄は顔を赤くさせたまま。

「えつと、じゃ、邪魔してごめん！ ……それじゃ、お幸せに！」

なんて、意味の分からない言葉を残して、部屋を走り去って行った。

「ちょ、弥澄さん！？ 誤解……」

千姫は弁解しようと弥澄を追おうとするが、もう弥澄の背中小さくなっていて、諦めたようにため息をついた。そして、部屋にいる迅に視線を移した。

「弥澄さん。行っちゃったよ。誤解を解かなきゃね」

「千姫が蒔いた種だろ。俺は知らないよ」

「ちょ、迅」

迅はめんどくさそうにため息をついてから、千姫の横をすり抜けて、そのまま部屋から出て行ってしまった。

一人残された千姫は遠くなっていく迅の背中を静かに見つめた。迅の背中も見えなくなり、完全に一人になった千姫はため息をついた。

「……また暇になっちゃったな」

ぽつりと呟いても誰かが返事をしてくれるわけもなく、静かな部屋に消えていった。しばらく、思案していた千姫は何か思い付いたように駆け足で部屋を出て行った。

部屋を出て、向かったのは城の書庫。

こないだ見つけた本でも読もうと思ひ、書庫に向かえば、どうやら先客がいたようで人影があった。

人影は扉を開ける音に気が付いたのか、振り返った。

「……やあ、姫君。こんな所でどうしたのかな？」

「あ、玖零さん。暇だったから本でも読もうと思って……。玖零さんこそ、仕事は？」

「俺は休憩だよ。難しい事は全部都架也と徠牙に任せてるからね」

にやりと言う言葉がよく似合いそうな笑顔で玖零は微笑む。千姫はどう反応すればいいか分からずに曖昧に笑う。そこで、玖零の持っていた本に気付いた。

綺麗な青色の表紙の本は何処か見覚えがある。記憶を思い返せば、すぐに思い当たる。

前に書庫に來た時に見つけた本で、面白そうだからまた読もうと思っていたもの。

千姫の視線が本を見つめていたのを気付いたのか、玖零は優しく微笑んだ。

「姫君もこの本に興味があるのかい？」

「はい。前にここに來た時に見つけたんです。その本面白かったですか？」

「そうだね。中々に興味深い話だったね」

含みのある笑顔で微笑む玖零に千姫は不思議そうに首を傾げた。そんな千姫を見て、玖零は更に笑みを深めた。

「ねえ、姫君はこの本の内容を知ってる？」

「え、あ、はい。大まかにですけど。……確か、女の子が異世界に飛ばされて、その狂った世界の神を仲間と共に止めるって話ですよね」

「うん。その通り。……ねえ、姫君はこの話本当にあったと思う？」

「え？」

玖零の突然過ぎる質問に千姫はいつもの冗談かと思い、玖零を見れば、玖零は真剣な表情で千姫を見つめていた。

茶化す事は出来ない雰囲気に千姫も真剣に考える。そして、しばらく思案した後 ゆっくりと口を開く。

「……そうですね、本当にあったらその女の子は相当大変だったんだらうなって思います。でも、ただの物語なんですよね？」

「いや、そうとも言いきれないのかもしれないよ」

「え？」

「この本……いや、この本だけじゃない。他にも数冊の本は、いつからここにあったのか誰も知らないんだ。気が付いたら、ここにあった」

淡々とした玖零の口調に背中に寒気が走る。

気が付いたら、ここにあった？

そんな事有り得る筈がない。

「俺はね、思うんだ。姫君はことは違う世界から来たと言っている。だから、ここも姫君の居た世界とも、また別の世界がまだ沢山あるんじゃないんだろうかってね。それで、いつの間にかあったこの本達は俺達の知らない別世界であった本当の事が記されてるんじゃないかってね」

違うとか、有り得ないとか、否定の言葉が出てこなかった。確かに世界が沢山あっても不思議じゃないと思う。

今、私達がいる世界の直ぐ傍に別の世界があるかもしれない。私達が居た世界と今、私達が居る世界。世界が二つしかないだなんて誰が決めたんだろうか。

例えば、元の世界のように平和な世界があったり、この世界のよきに戦乱の世界があったり、特殊な能力を使える世界があったり、魔法とかが使える世界だって有るかもしれない。

私達が知らないだけで、感じ取れないだけで、世界は沢山あり、

平行に存在しているのかもしれない。

IFの世界、又はパラレルワールドとでも言うものだろうか。

玖零の言葉は何処か幻想的で人を信じさせる力があつた。

「じゃあ、この本はこことは違う別世界で本当に起こった事が書かれていると言う訳ですか？」

「あくまで俺の予想だけだね」

ふふ、と笑う玖零の顔は、どこか幼く、子供のように無邪気であどけなかった。初めて、玖零の本当の笑顔を見た気がした。それに千姫も笑い返した。

「……もし、本当だったら、とても凄いですよね」

「そうだね。でも……っ！」

千姫が笑い掛ければ、玖零も笑顔のまま、何かを言おうとして、遮られた。

スパアンと、良い音が鳴り響くくらいに勢いよく、頭を叩かれた事により……。

玖零は叩かれた頭を押さえて、不機嫌そうに叩いた人物を睨んだ。そこにいたのは、やはり不機嫌そうに紅の瞳を吊り上げて、ハリセンを持っていた悠緋だった。

「仕事をさぼって、こんな所で読書か？　良いご身分だな、馬鹿王子」

「王子だからね。良いご身分に決まってるじゃないか」

「自分の立場が分かっているのに仕事をサボるのか。これだから救いようのない馬鹿は」

「救いようのない馬鹿？　その言葉そっくりそのまま返すよ。あん

な所にずっと籠ってたって、能率が落ちるだけだろ？ 気分転換も必要なんだよ。そんな事も分からないのかい？」

悠緋の言葉に不敵な笑みを浮かべながら、反論する玖零。お互い一步も譲らないで、睨み合う。

この二人の喧嘩には慣れたが、さすがに目の前でやられると、どうすればいいか分からない。

千姫は玖零と悠緋の顔を交互に見つめて、ゆっくりため息をついた。

お手上げです。そう雰囲気は語っていた。

元々、この二人の喧嘩を止められるのは、一人だけなのだから、当然と言えば、当然だ。唯一、二人を止められる人はいまこの場にいる。つまり、どうしようもない。

千姫は諦めて、二人の気が収まるまで、待っていようと思いついた時、一人の人物が現れた。

「千姫様。こんな所にいたのですね。……って、またですか？」

「奏さん。はい、またなんです」

突然現れた奏に驚きつつも、目の前で言い争いを続ける玖零と悠緋を見て、疲れたように千姫が頷いた。

奏は困ったように苦笑しながら、玖零と悠緋の間に立った。

「まあまあ、玖零様も悠緋様も落ち着いて下さい。お茶でも飲みますか？」

にこっと穏やかに微笑んだ奏に対して、玖零と悠緋は最初目を丸くさせていたが、やがて毒気を抜かれたように二人は、苦笑した。

「そうだな」

「じゃあ、一杯頼むよ」

「かしこまりました。では、場所を移動しましょうか。あ、千姫様も飲みますよね？」

「え？ あ、はい。お願いします」

都架也以外に二人の喧嘩を止められる人がいると思わなかったの
で、喧嘩をあっさり止めてみせた奏に呆氣にとられながらも千姫は
頷いた。奏はにこりと穏やかに微笑んだ。

「準備してまいります」

丁寧に一礼してから、書庫を出ていった。その後を玖零と悠緋も
続けば、千姫も後をついていった。

書庫を出て、大広間の椅子に座っていれば、カチャカチャと音を
立てながら、奏が現れた。奏の手にあるお盆には、見るからに高級
そうなカップなどが乗っていた。

奏はそれをテーブルに置くと、紅茶を注ぎだした。途端に部屋に
紅茶の良い香りが広がる。

「どうぞ」

奏に渡されたカップを受け取り、玖零は笑みを深めて、一口飲み
込んだ。

「やっぱり奏の淹れたお茶は最高だね」

「ああ、そうだな」

「ありがとうございます」

玖零の言葉に悠緋が頷き、奏はいつも通りの穏やかな笑顔で、一礼した。そして、再びお茶を淹れだして、千姫にカップを手渡した。

「ありがとうございます」

千姫もお礼を言ってから受け取り、まだ熱い紅茶を口に含んだ。途端に口の中に広がった甘い味。こないだ飲んだものとはまた違う味。

奏の淹れるお茶は毎回味が違っていて、どれも凄く美味しい。あまりの美味しさに千姫の頬が知らず知らずの内に緩んでいた。

「あれ、みんなで何してんだ？」

「あ！ 奏のお茶だ。いいなー、僕も飲みたい」

突然、穏やかな空気の中に聞こえた声に千姫は、視線を動かして、声の主を見た。

そこにいたのは、きょんととしていた弥澄と羨ましそうに奏の淹れたお茶を見てる徠牙だった。それに奏が穏やかに微笑みを返してから、口を開いた。

「弥澄様と徠牙様の分もありますよ」

「本当！？ じゃあ、僕のもお願い！ 弥澄様も飲みますよね？」

「そうだな。一杯頼む」

「かしこまりました」

再び一礼をして、カップにお茶を注ぎ淹れる奏に満足そうに微笑んで、徠牙が椅子に座れば、弥澄も椅子に座った。

そこで、弥澄は千姫の存在に今気付いたように驚いて、目が合えば、ハッとしたように椅子を立ち上がり距離をとった。弥澄の突然

の行動に皆、不思議そうに首を傾げた。

当の本人、弥澄は何故か顔を赤くさせて、千姫を見ていた。

千姫は不思議そうに首を傾げて、口を開こうとするより早く、弥澄が口を開いた。

「だ、大丈夫だ！ 誰にも言っていない！ 迅と千姫があんな関係だったなんて、誰にも言っていない！」

「はいっ!？」

予想していなかった言葉に千姫は口を大きく開いて目を丸くさせた。開いた口が塞がらないとは、正にこういう事だろう。

弥澄は弥澄で千姫の反応を見ていないのか、顔を赤くさせたまま、視線を逸らしながら、両手をぶんぶん大きく振った。

「大丈夫、大丈夫だから！」

「弥澄様。言っていないと言った側から、言ってますよ」

「へえ、姫君と迅ってどんな関係なのかな。実に興味深いよ。弥澄、詳しい話を聞かせてくれるかな？」

「……あんな関係？ 一体何があったんだ？」

「……千姫、一体弥澄様に何したの？」

皆は暫く呆然としていたが、我に返ったように口々にそれぞれの反応をした。

奏はいつものように穏やかに微笑んでいて、玖零は含みのある笑顔を浮かべていて、悠緋は不思議そうに首を傾げていて、そして、徠牙は……。

ぞくりと、背筋に寒気が走るような冷たい視線を千姫に向けていた。しかし、千姫はそれに構う余裕などないのか、真っ直ぐ弥澄を見つめて、慌てたように口を開いた。

「ちょっと、弥澄さん！ 誤解です！ 誤解！」

「だ、大丈夫！ お、俺は分かっている！」

「全然分かってないじゃないですか！」

「ふうん。で、一体どういう事なのかな？」

「え？ ああ、実は……」

「だから誤解ですってば！ 何を話そうとしてるんですか！」

そんな感じで暫く、うるさい……否、賑やかに会話を繰り広げられたのだった。その後、弥澄の誤解が解けるまで、約一時間程かかったとか、かからなかったとか……。

長い討論の末、ようやく弥澄の誤解が説けた時には、もう千姫はぐったりと疲れきっていた。

当然と言えば、当然だろう。弥澄には何を言っても大丈夫、大丈夫だ、と言って聞く耳持たないし、玖零は楽しげに笑いながら、千姫と弥澄の会話に横槍をいれていた。

悠緋と奏は黙って話を聞いていただけだけど、徠牙に妙に敵意のこもった冷たい視線を向けられて、千姫は寒気を覚えていた。

せっかく徠牙と大分仲良くなれてきたと思ったのに……。そう思うが、目の前で誤解している弥澄の誤解を説くのが先だった。

玖零の横槍のせいで話が脱線しまくったが、ようやく誤解が説けた事にもうぬるく……。いや、既に冷えきった紅茶を一口啜って、千姫は一息ついたのだった。

「……お疲れ様です、千姫様」

穏やかに微笑みながら、新しい紅茶を用意してくれた奏にお礼を言って、カップを受け取る。

受け取ったカップからは、湯気が出ていて、カップごしに伝わる温かさが千姫の心を次第に落ち着かせた。漸く落ち着いた千姫と弥

澄達。

騒がしい空気が和やかになり、まったりとした空気に癒されていた。そんな時、扉が開いて、三人の人影が入ってきた。

視線を移せば、そこにいたのは、いつものように穏やかな微笑みを浮かべている都架也といつもより気だるげな……と言うより、疲れきっている迅に何故か目を吊り上げて玖零を睨んでいる白桜だった。

「兄様！　いつまで休憩してるんですか！　いい加減に仕事してください」

「は、白桜。悪かったよ。謝るからそんなに目くじら立てて怒るなよ。可愛い顔が台無しだぞ」

「余計なお世話です」

白桜の剣幕な表情に玖零もひきつった笑顔で、まあまあと宥めた。

「ふふ、相変わらず玖零は白桜さんには頭が上がりませんね」

「全くだ。情けないな」

くすくすと可笑しそうに笑う都架也の言葉に悠緋も紅茶を啜りながら、仏頂面で同意した。

「……迅、大丈夫？　なんだか疲れてるみたいだけど、何かあった？」

「あー、あったよ。ありまくりだよ。本当に有り得ない」

「そんなに？　一体何があったの？」

「別に、千姫には関係ないだろ」

心配そうに言った千姫の言葉に迅は気だるげに緩めた表情のまま、一言そう言って視線を逸らした。

それに千姫が、むっとしたように頬を膨らませて、何か言おうとした言葉は、突如荒々しく開かれた扉によって遮られた。

「王子！ 大変でございます！」

「どうした？」

荒々しく扉を開いた一人の兵士は無礼を詫びながら、息を切らせたようにそう叫んだ。それに玖零は視線を兵士に移して、話の続きを促した。

兵士は一度頷き、再び慌てたように口を開いた。

「乞壬の者が城に侵入して参りました！」
『なっ！？』

兵士の言葉に驚きの表情を浮かべたのは、玖零だけではなく、その場にいた全員だった。しかし、すぐに表情を引き締めて、玖零が口を開いた。

「状況は？」

「はっ、相手は五人。ただいま玄関ホールの中で我々が応戦しております。相手の内、三人は乞壬の王専属守護者と名乗っております」

「なんだって！？」

「……乞壬の王専属守護者。あいつらか」

乞壬の王専属守護者。その言葉を聞いた途端、弥澄達の瞳が鋭くなった。次の瞬間、弥澄と徠牙は勢いよく立ち上がり、部屋を飛び出して行った。

「姫君は危ないから、ここで待ってな。迅と白桜と奏もここで待機

だ」

「絶対にこの部屋から出ないで下さいね。白桜さんは、もし敵が来た時、千姫さん達を護ってあげてください」

「分かりました」

「まあ、一人たりともこの部屋に近付けないようにするけどな、念のためだ」

それだけ言い残すと玖零、都架也、悠緋も部屋を飛び出して行った。あまりにも突然過ぎる事態に千姫はついていけずただ呆然としていた。

乞壬の王専属守護者。

一週間程前に会った人達がいまこの城に攻めてきている。

どうも現実感が湧かなくて、千姫は状況を把握出来ない。

だって、悪い人達には見えなかったから。そんな人達が敵として攻めてきたなんて、そんな事が想像出来なかった。

「千姫」

「……あ、なに？」

「なにボーッとしてんのさ」

「べ、別にボーッとなんか……」

してない、なんて言えなかった。確かにボーッとしていたかもしれないから。

「千姫、迅。危ないから扉から離れてた方がいいわ」

「そうですよ。お二人共お下がりください」

「あなたですよ、奏さん。あなたも戦えないんですから」

「はは、そうですね」

いつも通りの穏やかな微笑みを浮かべる奏を見ていれば、やはり

危機感などがある筈もなく、外が静かなせいもあり、千姫は今起きている出来事を全く現実のものと見ていなかった。

弥澄達が向かった玄関ホールが既に血の海になっていたことも知らずに……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0163z/>

時空夢想記

2011年12月3日21時49分発行